吸血王と魔法と異世界

マスラヲ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本で学生をやっていた青年がある日交通事故で亡くなる。

しかし彼は運よく転生の機会を得て、かねてより自分の望みだった魔法を扱える世界へと新たに旅立った。

青年の新しい名は【吸血王】ライール。魔法という力は果たして彼の進む道にどのような結果をもたらすのか。彼の新世界での旅はまだ始まったばかり。さぁ楽しもうか。

目次

プロローグ　1
1話　7
2話　17
3話　25
4話　31
5話　39
6話　48
7話　60
8話　69
9話　76
10話　87
11話　97
12話　109
13話　122
14話　140
15話　154

プロローグ

俺は転生した。

俺が交通事故で死んだその日、確かに死んだという確信を得た後、意識が戻り目を覚ますと俺の暮らしていた部屋に突っ立っていた。

白昼夢のような不思議な体験をしただけなのかと内心首を捻っていると、部屋にかけてあったデジタル時計が俺の轢かれたであろう時間を指して止まっていたので、おかしいと感じ、体を動かそうとするとこれも動かない。

なにかあると思っていると、目の前に自らを神と名乗る存在が現れた。

性別は男。初老に差し掛かった立派なひげをアゴに蓄えた老人だった。

その神によると、新年に日付が変わる瞬間にランダムでその年に死んだ中から1年に一人選び、転生を行うらしい。俺が死んだのは8月の夏休み、図書館へ受験勉強をしに行く途中だったので、俺の中では一瞬でもすでに半年近く俺（の魂？）は眠っていたことになるのか。

この転生は昔からの決まりらしく、俺を転生してくれた神も始まった理由は特にわからないらしい。

その後に「世界の停滞を世界が恐れたからかもね」と言っていたので、あるいは俺もそうなのではと思ったが。

付け加えると、他に死んだ人間は普通に天国か地獄に行くらしい。死んだ人間は全員何らかの形で再び転生するというのは人間の勝手な妄想だったようだ。そんなこと言ったら天国だとか地獄だとかも妄想なのだが、そこら辺は神も「なんで人間に天国や地獄の存在が想像できたのかわからない」らしい。

それは置いておいて、今回転生したことに対する感想としては、俺個人としては新たな人生を送れるということで得した気分だ。

若干心の中で興奮しながら神に何処へ転生するのかと聞いたら、ある程度は希望を聞いて選ばせてくれるらしい。

その時に説明を聞いたところ、昔の人間の傾向としては転生と言うと「過去に」「未来に」「おとぎ話の中に」というのが多かったらしいが、ここ最近は文明も発達したからなのか「映画の世界に」「漫画の世界に」「小説の世界に」というのが一般的になってきているらしい。

ちなみに転生する世界は平行世界なので、過去を改変しようが、未来をめちゃくちゃ

にしようが、原作をぶち壊そうが関係ないと言われた。
つまり好きに生きていいということだ。
さて、そんな条件を教えてもらった俺がただ一つ、転生する世界に希望するのはこれだ。

魔法がある世界。

俺が生まれたのは地球という星で、そこでは科学文明が栄えていた。
どのような事象にも科学的な根拠があるとされ、超常的な能力を持つとされる人々も、嘘か誠か分からない怪しい存在という扱い。
はっきり言ってロマンがない。
いや、ないというより入りこむ余地が残されていないと言った方がいいのか。
俺としては超能力も信じたかったが、なにせそれを直接確かめる方法がないのでそれも確信が持てない。
しかし始めから魔法という奇跡が起こせる世界ならどうだろう。
そんな世界でもう一度生を受け、あるいは魔法に触れる機会が、さらに言えば魔法を使う機会が得られれば。

どんなに心躍る生だろうか。

そんな想いを胸に抱いて願ってみたところ、神はその後魔法のある世界について細かく希望を聞いてきた。

科学と魔法が互いに区別されているが共存している世界がいいか？

魔法のみが発達した世界がいいか？

魔法と科学が融合した技術が発明されている世界がいいか？

俺の答えは「科学も魔法もあるが、魔法は科学を享受する人々に対して秘匿されている世界」とした。

これはまがりなりにも科学を享受して（記憶は受け継がれるらしい）生きてきた俺が、いきなり科学のない世界に行っても、上手く生活していける自信がなかったためだ。しかし純粋な魔法には触れたいので、このような結論に達した。

そして世界の希望の次に、転生したとして個人プロフィールはどのようなものがいいか聞いてきた。

種族は？

身分は？

性別は？

容姿は？

名前は？
能力は？
そのどれもがはっきり言えばどんな世界に行くかによって変わるのでは？といった所、その意見如何によって決めるらしい。
「それとも行きたい世界に心当たりはあるの？」と聞かれたが、俺は基本的に元の世界で見聞きした小説や映画の中には転生したいとまで思うほど惹かれるものがなかったので、おとなしく質問に答えることにした。

種族は魔法の才能が高い種族ならなんでも。ただし人型で。俺にだって人間（の女の子）と仲良くしたいという欲求はある。
身分は生きるのに苦労しなければなんでも。ただし王族とか生きていく上でやたらいそがしそうな身分はカット。
性別はもちろん男。
容姿は特に整えてもらわなくても、両親に似た子どもとして普通に生まれればいい。
名前もその世界の両親に決めてもらえればいい。
能力は魔法の才能は種族で言った通りで後はその種族や体の構造に準じたものでいい。

俺としては魔法を使って楽しく生きていければいいので、あまり贅沢をしたいというような欲求はない。よってこのような希望になった。
それにすべて許可が出たので、最後に神から転生する世界について告げられた。
俺が転生するのは――――――――

漫画【魔法先生ネギま！】。

こうして俺は、一瞬再びブラックアウトした後。
『吸血鬼』の里に生まれ落ちた。

俺は転生した。

1話

俺は今、非常に驚いている。
まさか吸血鬼として転生するとは思わなかった。
いくら俺の知らない漫画の世界とはいえ……。

自分が吸血鬼ではないかと気付いたのは本当に最初からだった。
俺がブラックアウト後、初めて目を開いた時、目の前では自分を抱いて見下ろす二人の男女がいた。
「ダーリン、私たちの希望が目を覚ましたわ」
「ああ、見ているとも」
どうやら察するにこの二人が両親らしい。
母親らしき人物は一言で言えば深窓の令嬢。腰まで届く金髪がまず目に入る。そして愛おしそうににこちらを見つめる瞳と微笑む口元。その表情は母性に満ちている。
さらには完璧なプロポーション。完全無欠な美人だ。

一方父親らしき人物はこちらも美形。精悍な顔つきをしている赤髪の男性だ。なにやらにっこりほほ笑むその口の隙間から人間にしてはやけにとがった八重歯がちらちら見えているが俺は目をそらした。きっとコンプレックスな歯なんだろう。きっとそうだ。

……いやまさかそんな。

考えていることが事実なら種族がおかしいだろ。

「ああ、私の愛しい子。まさか私に赤ちゃんができるなんて思ってなかったわ」

そう。俺は転生したわけだから今俺は赤ん坊だ。だからしゃべることはできないし、上手に体を動かすこともできない。

ゆえに今の俺の心の中の複雑な気持ちは、目の前の幸せそうな夫婦にはとどかないだろう。

「運がよかったのだ。吸血鬼である俺が相手ではそう子宝に恵まれる機会があるわけではないのだからな」

「ええ、本当に。ダーリンと結婚したことに後悔はないけれど、やっぱり子どもは欲しかったわ。私だって女ですもの。だから本当に運がよかったわ……」

本当に愛おしそうにこちらを見つめながら頬をなでてくる美人母。

しかし不思議と、こんな美人に撫でられているのに青年という年代の男としてより、

息子としての感情が上回り、こちらもうれしくなってきてしまった。
……うん。意図的に父の言葉を無視したがやはり気になる。
吸血鬼。
はっきりそう言った。
なら俺の予測通りそうなのだろう。
正直びっくりだ。
神よ。確かに魔法的な才能が高ければ良いといったが、これは予想外だったぞ。
……まぁいいか。
今は純粋に新たな生を新たな世界で無事得たことを喜ぼう。
そんな感情に浸っていると、途端に眠たくなってきた。
これは赤ん坊としては仕方のないことだ。寝るのが仕事だからな。
さて、とりあえず自分が吸血鬼の血を受け継いだという事実をしっかり受け止めて、ゆっくり休もう。考える時間はたっぷりとあるのだから。
「お休みライール。安らかに」
母の言葉を最後に、俺は腕のぬくもりを感じながら眠りについた。

名前がライールとなってあれから１０年。もう前世の記憶もおぼろげになってきた今日この頃。

少し時間軸が飛ぶが、幼少期の頃のことなど語ってもおもしろくないので割愛する。恥ずかしいわけではない。ただ本当に繰り返し同じことをしていただけなのでおもしろくないのだ。

ただそれだけだ。他意などない。断じて。

さて、この１０年で分かったこと、やっていたことを簡単に説明しよう。

まず分かったことだが、これは俺が吸血鬼として生まれたことの続きとでもいうのか。

どうやら俺は具体的には吸血鬼ではなく、その上位種【吸血王】という種らしいのだ。

吸血鬼である父ハインド（推定年齢５００歳以上）と人間である母クレア（推定年齢２０代しかし吸血鬼と交ぐわったので寿命は延びている）の間に生まれるのは、高確率で吸血鬼だろうと子供ができた時に思っていたらしいのだが、まさか吸血王が生まれる

とは、と後から聞いた。

その名の通り吸血鬼の中でも特別な存在で、その能力は他を圧倒している。

まず、普通の吸血鬼としての弱点は生まれた時からない。つまり不老不死であること、魔力が桁外れであること、身体能力が高いこと以外では人間と変わらないということだ。

なんだこのフルスペックはと思った俺は悪くないだろう。

案の定滅多に現れる存在ではなく、数千年に一人生まれるか、という確率らしい。

おかげて里の中では注目の的だ。

俺が生まれた土地は吸血鬼達のみが住む山深くの里だ。人口は家の家族を入れても数世帯しかないが、吸血によって下僕にした人間がたまに（食料や情報入手のため）出入りするので増えたり減ったするが、基本的に十数人ぐらいしかいない。

さすがに吸血鬼は数が少ないなと思った。

これは余談だが、数が少ない吸血鬼だが、真祖とよばれる吸血王の劣化版のような吸血鬼が生まれることがあるらしい。生まれるという表現に若干含みがあり、理由を母に聞いたところ人間の手によって生まれた吸血鬼をそう呼ぶらしい。

この里にはそういった経緯で生まれた吸血鬼はいないが、たまに出てくるらしく、彼ら彼女らは数百年もすれば人間に討たれてしまうのが通例らしい。なぜなら自然に生

まれる吸血鬼は普通周りにも吸血鬼がいる可能性が高く、弱い子供のころは守ってもらえるが、真祖は孤独な元に生まれるので、生き残る確率が極端に低くなってしまうとのことだ。

なんとか救いたいと思ってしまったのは、平和ボケと言われる元日本人の性だろうか。

俺はいつか里を出て旅をしたいと思っているので、両親に頼んで情報を得つつ、その時に真祖といった存在がいないか探しに行こうと決心した。

この里に連れて来てあげれば平和に生を謳歌できるだろう。それを望むかどうかは会ってみなければわからないが。

それはさておき今度はこの世界についてだ。

今俺がいる世界はどうやら前世と同じく地球。西暦で大まかに言うと１３００年代だ。里のある場所はヨーロッパのどこかの山脈の間にあり、現在の人間の技術では到底到達できない未開の地。たとえ科学技術が発達しても魔法的な結界で覆われたこの里を発見することはできないだろうが。なにせ里一番の魔法の使い手で、歴戦の戦士でもある我が父が張った結界だ。はっきりいって人間の魔法使いでさえ、英雄クラスでなければ発見は難しいだろう。まぁ発見したが最後、我が父に殺されるだけだろうが。

外の世界では戦争が絶えず、たいそう物騒だという話だ。

もともと人間からは恐怖の対象である吸血鬼は人里離れた場所で静かに暮らし、たまに血を求め闇にまぎれて下りるくらいで、人間がどう争おうが関係ないのだが、一応情報は仕入れる方針にしている。里の長である父の意見が採用されてこうなったらしい。

さて次はやっていたことについてだ。

俺は吸血王という良い意味でも悪い意味でも特別な種族に生まれてしまったので、とにもかくにもまずは体を鍛えることから始めた。それが3歳の時。

次に体術の取得を父に頼みこんで教えてもらった。父は若いころ（と言っても１００歳～２００歳くらいの時）に様々な戦争に傭兵として参加し、あらゆる魔法技能・体術を会得したので、戦闘に関しては父に教えを請うのが一番なのだ。これが5歳の時。

戦闘技術に関しては父に教えてもらったが、魔法全般に関しては母に教えを請うた。父は戦闘に生かせる魔法しか知らず、体術と合わせてそれらも教わり、吸血王であったこともありかなり凶悪な仕上がりになったと自分自身思ったのだが、はっきり言って詠唱とか魔法陣とかかなり大雑把にしか把握していないようで、教え方も……うん。ひどかった。なのでその辺りの細かい理論と、回復魔法などの補助魔法については、どこかの宮廷魔法使いだったという母に教えてもらった。もちろん吸血王の本領を発揮し、あっという間に習得してしまったが。その時母と父には遠い眼をされたが、楽しんで生きるという俺の目的を果たすためには多少のことには目をつむる。そうした魔法関連

の全習得にはまだ遠いが、１０歳になった俺の今の状態でも、人間の中で天才レベルに達しているので、順調と言えるだろう。

しかし父はともかく母はいったい何者なのだろうか。二人の出会いをぜひ聞きたいものだ。

そして俺は、こういった訓練と合わせて情報収集も行った。やはり何事も情報が命だ。

魔法を習得している時もかなり楽しかった。両親からは目を輝かせて教えを請う俺はかなり教えがいがあったと言われるほどだ。しかしただ覚えるだけでは魔法の楽しみ方としては足りない。

やはり使ってこそ。だから旅に出ると決めている。世界を（この場合は異界にあるという魔法世界も含めて）回れば、魔法を含めた諸々の技術を使う場面が多々あるはずだ。そうして人生を送ることが、俺にとってこの世界にきた本来の目的に最も沿う形になると確信している。里に引きこもっていては体験できないこと、出会えない人々、見ることのできない景色。そして知りえない未知の魔法。

夢が膨らむな！

たとえそれで人の命を奪うことになっても、だ。

俺は吸血王として生まれたからなのか、人間の命を奪うことに関してなにも感慨がわ

かない。

この前も父に「訓練の成果を確かめに行こう」と言われ盗賊退治に行って、何人か人を殺したが、なにも思わなかった。

人並に良心はあるが、相手が悪（俺の中の判断基準で）ならば、殺してしまう恐怖よりも、魔法を使いたいという欲求が上回るらしい。対象が人間ならばなおさら。

さて、１０年間の中で俺が行ってきたことはこれでだいたい確認できた。

あと数年したら成長も止まり、その容姿のまま完全な不老不死となるらしいので、その時になったら旅に出よう。両親の許可も取ってある。あれだけ溺愛してくれていたので渋られるかと思ったのだが、不老不死で吸血王ならどんなことになっても命は落とさない（落とせない？）のでいいらしい。しばらく会えなくなるのはさびしいと言っていたが。

ちなみに容姿は父の血と母の血を半々ぐらいに受け継いだため、髪は先っぽが少し金色で全体的には赤髪。瞳の色はやはり赤で、母のように優しげながらもキリッとしており、一見優男風だが、感じられる覇気がそうさせているのか、父に似て精悍な印象を受ける顔つきで、背もぐんぐんと伸びている。成長が止まるとその後は姿形に変化はないようなので、どうかこのまま美形として立派に育っていってほしいものだ。

旅の目的はもちろん第一には魔法を活かしておもしろおかしく楽しく暮らしていくということだが、明確な目標というものを考えておくのもいいかもしれない。真祖を連れてくるというのも一つだろう。

今のところ他に思いつくのは……ふっ。

俺も男だ。そして運がいいことにイケメンに部類される男だ。

此処まで言えばわかるだろう？

両親に負けないくらいの幸せをつかむことを、男として忘れてはいけないだろう！うむ！

ちなみに俺はその辺り鈍くはないので（なぜなら既に里の女の子から猛烈なアタックがあったから。さすがにまだそこまで飢えてないので遠慮したが）、包容力のある男を目指して頑張りたいと思う。

さて。それじゃああと数年、あらゆる困難から自分と将来の伴侶（予定）を守れるようにひたすら鍛えていきますか。

……やっぱり魔法って楽しい！

2話

修行を続けてさらに１０年が経過した。
どうやらやっと成長が止まり、今の容姿に固定されたようだ。
鏡を見て自分で驚いたわ。
何だこのイケメンはと。身長は順調に伸び、１８０ｃｍ後半ぐらいにまでなった。
前世の俺なら間違いなく妬んでいただろうレベル。
この１０年で父と母から教われることはすべて教わった。
二人からも、
「もう教えることは何もない。ライール、立派な男になったな」
「さすが私の子だわ。すごい早さで魔法も覚えちゃったわね。もうライールかっこいいっ。きゃ～」
とお墨付きをもらった。
母よ、落ち着いてください。
「父、母。話しがある」
そしてついに今日、鏡で確認を終えた俺は旅に出ることにした。前々から両親には修

行が終わり、成長が止まったら出ると言ってあったので、後は最低限の準備をして俺が「行く」と言えばいいだけだった。
「やはり行くのか」
「ああ。俺は魔法が好きだ。もちろん魔法の使い方によって魔法は悪にも善にもなることはわかってる。だけどそれでも俺は魔法を使いたい。そして楽しく人生を生きたい。不老不死の身だからこそ。俺は俺の納得できる生を吸血王として謳歌したいと思う」
　許可はしてくれていたが、寂しさから厳しい顔で再度問いかけてくる父に俺は素直な気持ちを話した。
「……ふっ。まったく、親に似ず素直に育ったものだ。だがそれがうれしい」
　父は厳しい顔つきを緩め、一転俺のことを慈しむように微笑んだ。
　修行の時は容赦なくこちらを痛めつけてくる鬼のような人だったが、時々見せるこのどこか包み込んでくれるような暖かな表情をする時もあった。それを見るたびに父なりの愛を感じたものだ。
「……ぐすっ。ライールがぁ～。ライールが大人になっちゃったぁ～。でもかっこいいよぉ。うう……だぁ～り～ん」
「まったく……よしよし」
　母はいつも真っ直ぐに愛情を注いでくれた。その純心さは、子供のようだったが、そ

の両腕の中に抱かれた時はこの人が俺の母親なのだと確かに感じる温もりが心を満たした。何より母はいつも笑顔で、それを見ているだけで修行の辛さが吹き飛ぶのだから、感謝してもしきれないほどだ。若干父とラブラブすぎて見ているこっちが恥ずかしい時も多々あったが。それさえも息子としては家族を感じる貴重な時間だった。

「ライールよ。聞け」

「……はい」

いつものラブラブ空間を形成していた父と母だが、父はある程度母を慰めた後、真剣な顔をして俺を見詰めてきた。

「今こそお前に伝えよう。我が一族の家名を」

「!?」

今まで気にならなかったが、確かに俺は自分の名前しかしらない。吸血鬼に生まれたからそんなものかと思っていたが、家名はちゃんとあったのか。

「お前の名は。ライール・シュビッツ・ルドラ・ヴァンドール」

「ライール・シュビッツ・ルドラ・ヴァンドール……」

俺は確かめるように時分のフルネームをつぶやいた。

聞くと、なぜかストンと胸の中に綺麗に収まる感じがした。

「そうだ。その名を背負い、世界を見て来いライール」

「ふふっ。きっと大丈夫。なにせ私たちの子供なんですもの。がんばってね」
「はい。今までありがとうございました。時々は帰郷しますので、どうかお元気で」
俺は深々と頭を下げ、その場を立ち上がり荷物を肩に引っ提げて扉に手を掛けた。
そしてもう一度振り返り同じように立った両親に向けて家族がいつもやり取りするように言った。
「いってきます」
「「いってらっしゃい」」
そうして俺は吸血鬼に。
いや。
【吸血王】にふさわしい闇に包まれた森の中に溶け込んでいった。
ここからが俺の。
転生した世界での魔法生活は始まる。

里から出て5時間ほど険しい山を上り下りしていくと、山の中腹で朝焼けの中に人外としてふさわしい視力で人里を発見した。まだ10キロはあるだろうか。それほど大きな街ではなさそうだが、この時代にしてはそこそこの大きさだろう。簡易ながらも城壁があり、最低限街としての機能は整えてあるようだ。

情報ではこのあたりの領地は開拓地らしく、定まった領主がいない無法地帯と聞いている。秩序はある程度保たれているが、所謂騎士などの警察機構が存在せず、代わりにたくさんの開拓民と傭兵や商人が出入りする拠点的役割の場所となっている。

この情報も父の下僕となった人間が実際にあの名も無き街に入って仕入れてきた情報だ。信用度は抜群だろう。

人口はだいたい2千人弱。ただしこれは移動する傭兵や商人を入れた計算なので、本来この街に住む人間は1千～1千5百人くらいになる。未開の地を開拓するには少ないように感じるが、この時代それほど人口が多いというわけでもないので、こんな吸血鬼が隠れ住む奥地の近くまで人が来ているということだけでも立派と言わざるを得ない。

街に入ったら今日は人から色々な話を聞くため、そして何より魔法を使うために仕事

を日雇いの探してみよう。開拓地なのだから仕事は力仕事なら腐るほどあるはずだ。そこでばれない様に魔法を使い荒稼ぎして、旅の費用の足しにしようという目論見もある。多少の蓄えは両親からもらったがそれでもあって困るものではない。まぁ別に食べ物を食べなくても大丈夫なのですぐに必要というわけでもないのだが、それでも食べる演技は人の中で暮らす以上必要だろう。服や魔法を使う媒体を購入するためにも必要になるわけだし。

まさに一石三鳥。

もちろん重要なのは魔法だがな。

不届きものを退治する依頼なんかも探してみよう。俺の眼の届く所で悪は栄えさせない。俺は吸血王であり人間を守ってやる義務などないのだが、俺は魔法を使うなら自分も他人も気持のいいことに使いたいと考えている。たとえそれが偽善だとか自分勝手な解釈だとか言われても、俺は俺のやりたいようにやる。それが魔法で楽しく生きていくことにつながる。

助けたい時に助けられず、やりたいことをやれず、暴れたい時に暴れられず、守りたい時に守れない。

せっかく転生までして魔法を手に入れて。

そんな人生真っ平だ。

俺はおそらく自分本意な人間、いや吸血王なのだろう。
だがつまらない人生より、楽しい人生を。
この考えを曲げるつもりはない。
「お？　おいあんた。こんな所でどうしたい？　旅人さんかね」
どうやら考え事をしながら歩いていたら、いつの間にか街の近くについていたらしい。第一街人と接触したようだ。見たところ、木を切り倒して農地を広げる農夫のおっさんが目の前に立っている。良い汗をかいて一息ついた所だったようだ。彼の背後を見ると、街の門が１００ｍほど後ろに見えるほど森が切り開かれている。彼の他にもあちこちで更地と森の境界線で木に斧を振りかぶっている男たちがいる。
「ええ。今各地を放浪の旅の最中でして。よければお金を得られる仕事をと思っているのですが。腕には覚えがあるので力仕事から護衛なんかもできますよ」
「ほほぉ。こりゃちょうどいいや。そんならオラんところでひと働きしていかんかね。ちょうど傭兵が欲しかったところなんよ。最近この街を狙った盗賊団がはびこっててなぁ。他にも雇ってるんだが数が多いに越したこたぁねぇ。一つ頼むわ」
「はい。よろこんで」
その後、報奨金などの話しは別の人間にということだったので、その人間（第一街人の妻という恰幅のいいおばさんだった）に一日あたりの雇い金と盗賊を討ち取った時の

追加報酬の話しをして、俺も森の中に入って行った。
さぁ初仕事だ。気合を入れて魔法を使おう。
今までも父に連れられてこの場所とは違う方向の街近くまで出向き、暴れていた盗賊や山賊を訓練と称して粛清していたため、魔法隠匿の方法はある程度熟知しているが、それでも確かめてみたい。今の俺の実力を。
もちろん本気など出さない。
ただ少しばかり地形が変わるかもしれないが。

3話

仕事を受けたその日は何事もなく終わった。
昼には農夫たちを取り仕切る組合から簡単な弁当が出て、夜は街の宿が一杯ということで雑魚寝だがおいしい食事も酒場で摂れる。その時に色々情報も耳に入ってきたが、それは後で。
一日過ごしてみて思ったのは、この街は以外に金銭的に潤っているなということだ。
まさか傭兵（俺は旅人だがそのようなものだ）風情に日雇いで日当が出るとは思わなかった。
せいぜい倒せば報償がでる程度だと思っていたのに。
それに昼飯を提供してきたことにも驚いた。至れり尽くせりだろうこれは。
後は魔法を使える機会さえ巡ってくれれば文句はない。
俺は想いを明日に馳せながら目をつぶり眠りについた。
さぁ明日は現れてくれるのだろうか。
噂の盗賊、【黄金の魔女】は。

夜になり農夫たちが各々の家に引き揚げて行くことで仕事が終わりとなり、俺は疲れを癒すために、そして近隣の情報を集めるために噂話が集まる酒場に入ると、酒場特有の喧騒に包まれた。

雑多な雰囲気がするが、そこに不快感はなく、開拓地特有の人々の陽気さや明るさが満ちたいい酒場だ。

俺もカウンターに座り、店主に強めの酒を注文し、ちびちびやりながらその中に溶け込んで耳を傍立ててみた。

「最近商人の数が減ってないかい？　そういえばあの――――」

「馬鹿野郎！　あそこの看板娘は俺が狙ってんだよ！　お前は――――」

「母ちゃん元気かなぁ。仕送りが――――」

「おっちゃん！　酒おかわり！　あと――――」

「どうだいこのあと。娼婦を買ってさぁ――――」

本当に色々な話が聞こえてくるものだ。実際に入ったのは初めてなので、他と比べる

ということもできないが、これだけバリエーションが豊富なのもそうないだろう。
だが俺が聞きたいのは『これ』じゃない。
そう。例えば……これか。
「西の方じゃ戦が絶えんらしい。なんでも俺の故郷の国が周辺の国に喧嘩を売ったらしくてね。確かにうちの騎士様方は強いんだがね」
「そりゃあおめぇ。なんだってそんなことに？　治安がまた悪くなるだろうによう」
「そんなもん金だろ金。人が動く時は金か女と相場が決まってんだよ」
「ある意味であってるかもな。噂じゃ王子が隣の姫様に惚れちまったらしく結婚を申し込んだが断られ、なら力強くって腹積もりらしいぜ」
「ひぇ～、おそろしやおそろしや。まぁここじゃ関係ない話だけどよ」
「お前の国はなんていったっけ？」
「モラヴィア王国さ」
「そういやほかん所でも似たようなことが――――――」

なるほど。どうやら現在のヨーロッパは危険な状態にあるらしい。
戦乱の世。
いくつもの小国家が覇権を争い戦いを繰り広げる。

俺の知識ではヨーロッパ、戦争とくればせいぜいジャンヌ・ダルクって女がいたっけな？ぐらいだ。

まぁ時代的にそれはそれであってるっぽいが。

とにかく色々命の危険がはびこる危険地帯という認識でいこう。

俺にとってはなんでもないことだが、人から見てどうなのかという考え方でいかないと、この先困るだろうしな。

今ふと思いついたが戦争で手柄を立てて貴族か騎士になればそれなりにおもしろそうだな。不老不死な関係で長くは君臨できないだろうが数年は楽しく過ごせそうだ。うまい具合に小国で貴族に

「お前さん聞いたかい？　あの話」

「ん？　ああ、もしかして【黄金の魔女】のことか？」

お？これは……。

「なんでも相当やり手の盗賊らしいじゃねえかい。もう幾人もの商人が被害にあってるらしい」

「俺は直接その被害にあったって奴に話しを聞いたぜ。そいつはこの街から隣の街へ荷物を届ける最中だったんだが、その日は野宿をするために適当な木の下に野営準備をしていた。その時ガサガサと草木が一瞬強風に煽られて葉っぱや土が舞い上がり、そいつ

の目を塞いだ。すぐに止んだんだが気付いた時には荷物の一部がなくなってったって寸法よ。そして見たんだと。月に向かって空を走る小さな人影を」

「いやはや。なんとも奇妙な出来事だな。いっそ怪奇現象だと言ってくれた方がまだ納得できらぁ」

音もなく忍び寄り食べ物や金銭を掠め取り、そして忽然と姿を消す。その手口と闇夜に光る金髪を指して【黄金の魔女】。

その姿は様々な噂が飛び交っている。

子供だった、美女だった、そもそも人ではなかった、などなど。

確かに襲われた人は大勢いるのに、確かな情報は入ってこない不思議。

俺はこれを魔法による犯行だと考えた。

確かにまだ現時点で魔法の存在はそれほど広がってはおらず、いわゆる魔法使いと呼ばれる存在もこっちの世界では少ないが、いないわけではない。

それにいくら優秀な盗賊だってまったく姿を見られず、気配も悟らせず、物だけを掻っ攫うなんて真似、果たして出来るだろうか。

ましてやまだ科学的な進歩もないこの時代だ。純粋な体さばきだけで歴戦の傭兵を護衛に雇った商隊の警戒の網目を潜り抜けるなど、おそらく不可能だ。断言してもいい。

それを可能とする物が魔法というわけだ。
俺はこの予想が立った時から【黄金の魔女】を捕まえようと決めた。
何もとっちめてやろうというわけではない。
確かに人から物を盗むのは感心しないが、魔法を扱える者がなんの理由もなく人から盗みを働くわけがない。盗まなければならない事情が絡んでいるはずだ。
魔法というこの世界では万能の力を持っているなら、他にも稼ぎ方は色々ある。俺のように。
それでもあえて盗賊に身をやつしているということは……。
とにかく遭遇すれば簡単に捕まえられるだろう。
俺はそう考え、それからしばらく酒場に居続けた後、今日の野宿先に帰った。

4話

「ん？来たか」

明けた朝。今日も天気がよく、まさに魔法日和（？）。

時々切り倒すのに苦労する大木を農夫と一緒になって切り倒す作業をして暇を潰していた俺は、日も上がりきって照りつける太陽に良い汗をかきつつも（実は魔法を使って身体強化していた）、魔力を感じ取った。

それも思っていたよりも強大な。

俺と比べると小さいが、人の魔法使いではそのほとんどが返り討ちにあうであろうレベル。

（思ったより大物か？　いやしかし……）

これだけ強大なのに、隠蔽しないという時点でおかしな話だ。

魔力と技量が釣り合ってないというか。

「とりあえず近づいてみるか。《隠れ蓑》」

俺はオリジナル魔法《隠れ蓑》を発動。これはなんの捻りもなく気配や魔力、果ては姿まで完全に隠してしまう光系統の魔法だ。ちなみにどれかひとつを隠すことに使う

こともできる便利魔法だ。人の中に入って暮らす魔法使いにはのどから手が出るほどほしい魔法だろう。

もちろん本来は長ったらしい詠唱呪文があるのだが、俺は当然無詠唱。

（さて、姿を拝ませてもらうよ【黄金の魔女】）

若干初めてのそこそこの強敵にワクワクしながら農夫のおっさん達から離れて（もちろん本来の仕事である盗賊討伐のために気配を探り周囲にいないことを確認した上で）、昼間なのにあまり明るくない木々が生い茂る森に入って行った。

魔力を感じる方向に木の枝から枝へ飛び移りながら移動していると、やっと人影を発見できた。

やけに小柄だ。

というか。

（お、女の子？）

周りをキョロキョロ伺いながら恐々と移動していたのは、まだ幼い少女だった。

この少女、いや幼女が魔力の正体らしい。

背丈は１３０ｃｍほど。まだ女性としての起伏のある体型ではなく、汚れてはいるが整った容姿と地面に引きずるまでに伸びた金髪から、人形のような可愛らしさがある。

（彼女が【黄金の魔女】の正体なのか？）

だが、疑いようもなく魔力がすべてを物語っている。俺の予測は的中し、やはり魔法による犯行で間違いなさそうだ。

（後は現場を押さえて事情を聞くかな。場合によっては保護しよう）

さすがに俺もこんないたいけな幼女を捕まえて拷問しようなどという鬼畜になった覚えはない。

おそらくなにかしらのっぴきならない理由があるのだ。

（それにこの感じ……まさか同族？）

俺は彼女からある臭いを感じ取っていた。

それは体臭がくさいとかではなく、本当にただ『臭う』というだけの直感的なものだ。

しかし確信があった。

俺は吸血王。

そういうのには特に敏感だ。

そんなことを考えている間に、彼女は踏み慣らされた道の脇まで進み、そこからチラッと少し先を見ていた。おそらく襲う対象の存在を確認しているのだろう。

そして彼女にとっては運良く規模の大きな商隊が現れた。

俺の目にははっきりとその荷物が映っている。

あれは穀物類だ。おそらく開拓した土地に植える種などを運んできたのだろう。

これから必要になり需要が伸びる物を仕入れるのは商人の基本だからな。
そしてついに彼女の前に商隊が到達した。
その瞬間。
「そこまで」
「きゃっ！」
彼女が闇系統の魔法を使って自分の影の中に入る寸前の所で、俺は彼女の腕を掴んで引き戻した。
この時点で俺は確信した。
彼女こそ【黄金の魔女】だと。
「ちょっと移動するよ」
未だに腕を掴んでいる俺を呆然と見詰めている少女を無視して、俺は転移魔法を行使して飛んだ。

「それでどうしてあんな真似を？」
「ひっ……！」
人が入り込めない森の奥深くに転移し、呆然と当たりを見渡していた少女に事情を聞く。
しかし過度に怯えているようで、両腕で体を抱きかかえて縮こまったまま怯えた目で俺を見るばかりだ。
「最初にいっておくよ。俺は君を傷つけたりはしない。これは約束する」
「……ほんと？　ほんとに痛いことしない？」
「ああ。絶対だ」
俺がはっきりと断言し、安心させるように優しく微笑みかけると、震えていた体から力が抜け、表情からも怯えが消えていった。
「それじゃあもう一度聞こう。なんで盗みなんか？」
「だ、だってお腹が空いて仕方がなくって……」
おそらく自分が悪いことをしていたという自覚があるのだろう。素直に白状しているが、それは俺の反応を怖々と伺いながらだった。
だが問題はその態度ではなく、「お腹が空いた」という空腹感の正体と、彼女が自分の

ことをどれだけわかっているかだ。
「単刀直入に言うけど。俺は吸血鬼だ」
「……へっ？」
「証拠を見せよう。ご覧。この牙を」
俺はまず彼女に正体を聞く前に、自分の正体を明かした。
こう言った場合、相手が自分に何をするかわからない、どういった存在なのか分からない状態では聞いたところで正直に答えずらい。
ならばこちらから名乗ってしまえばいい。それも今回はおそらくこれで大丈夫なはずだ。
だから俺は普段から常に自分に掛けている擬態魔法を（といっても牙を普通の歯に見えるようにしているだけだが）解いた。
「う、うそ。あなたもなの……？」
「あなた『も』か。やはりな」
「あっ、いやその！」
「落ち着け。恐がらなくていい。俺は君を怖れたりしないし傷つけたりもしない。だからそう怯えるな」
うっかり言葉を発してしまい指摘すると取り乱しそうになったので、落ち着かせるた

めに頭をゆっくり優しく撫でてあげた。俺も小さい頃はよく母にやってもらい安心したものだ。

「あっ……う、うん」

可愛らしいな。顔を真っ赤にして照れている。

この反応を見るに、よほど人肌に触れていないと見える。どれだけ辛い境遇だったのか分かろうというものだ。吸血鬼として人間の世界を生きていくのは、相当難しい。こんなまだ吸血鬼として成熟していないこの子ならなおさら。助けを求めても自分の正体がバレたら追い出される。ひどい時には殺されそうにもなったろう。噂が広まれば討伐隊も組まれるだろうし、本当に行き場がない。たまに助けてくれる人がいても結局利用されるだけ。

そんな悲惨な運命を辿った吸血鬼の話など、里では良く聞いた。別にそれに対してどうこう言うつもりはない。しかし同族意識はある。できるなら力になってやりたいと思うのは傲慢だろうか。

「落ち着いたか？　ならもっと詳しい話をしてほしい。力になるよ。俺の名はライール。ライール・S・R・ヴァンドール。君の名は？」

「わ、私の名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルです。あ、あの。それで……」

「大丈夫。ゆっくりでいい。俺は何処へも行かないよ」

まるで俺をこの場に置き留めたいというように、矢継ぎ早に話をしようとするエヴァンジェリン。人と会話をする機会も久しくないのだろう。
だから俺はまた優しく頭を撫で、笑いかけながら語りかけた。
「う、うん。わかった。えへへ」
どうやらやっと気持ちが落ち着いたらしい。
体全体から力が抜け、気を張っていたらしくその反動で地べたにペタンとへたり込んでしまった。
「あ、あれ？」
「いいさそのままで。俺も座って話しを聞きたかったしな」
そうして俺は、エヴァンジェリンという小さな吸血鬼の話しを聞くことにしたのだった。

5話

「私は気付いた時にはもう吸血鬼だったの」
エヴァンジェリンの口から語られる話は、正直気分のいいものではなかった。
感情の起伏があまりないと自負している俺でも、胸がムカムカするほどだったのだから。
「そして目の前に立つ男が私をこんな体にしたのだと自慢げに言ってきたのっ！」
語り始めてその時の気持ちがぶり返してきたのか、怒りに声を荒げて、悲しさに身を震わせて、一生懸命に心の動揺を抑えながらエヴァンジェリンは続ける。
自分の１０歳の誕生日の日。それはいつも通りの日常。家族で祝う日。私を祝ってくれる日。そこにはきっとひとつの家族の形があっただろう。
しかし平和で平穏で愛おしい時間は唐突に終わりを告げる。
下らぬ目的のために男は家族を殺し、自分を実験台にした。
そして男の目論見通り成功したのだ。さぞ良い気分だっただろう。
一人の少女を吸血鬼にするという結果を生み出したにも関わらず。
そして少女は男を殺した。

「どうして！　なんで私がこんな目にっ！　どうしてよ！　うわぁあああああん！」
そしてついに感情が噴き出した。
今まで誰にも相談できず一人で抱え込んでいたはずだ。なぜならこの時代俺のいた吸血鬼の里以外に吸血鬼が生息する地域はない。それは父にも確認済みだ。
ゆえに人間の生存域をフラフラしている時点で、彼女は一人ぼっちの吸血鬼。
俺はこの時、母から聞いた「真祖」とよばれる吸血鬼のことを思い出していた。
おそらくエヴァンジェリンは真祖、人工の吸血鬼なのだろう。
「よくがんばったな」
「うえ？」
俺はただ一言そう告げて、何度でも頭をなでてやる。
同情ではない。断じてだ。
これは純粋な称賛。突然人から吸血鬼となり、１０歳の幼い少女一人でよくぞここまで生き残ったという素直な気持ち。どこにもぶつけようもない感情を押し込め、なるべく隠れて生きて、悪事にも仕方なく手を染めて、でもやっぱり辛い。
「一人は怖かっただろう。安心しろ。これからは俺が一緒だ」
「！」
頭を撫でることを止め、今度は優しく胸の中に抱いてやる。子供を落ち着かせるに

は、人の（俺は吸血王だが）温もりを感じさせてやるのが一番だと、俺の大切な人である母や父から教わった。
「ふぇ……うわぁあああああああああああああ！」
「そうだ。今は泣け。そして泣いた後また歩き出せばいい。それができないというなら俺が背を押そう。だから今はただ泣くがいい。エヴァンジェリン」
既に日は落ち始め、空は夕暮れに染まっている。
こんな日に限って空は、涙を誤魔化すための雨を降らせず。
その大きさを誇るかのようにただ真っ赤に染まる。
だがそれもいい。今日くらい良いだろう。
夜に生きる俺達のような存在にとって、日が落ちてから眺める空は。
いつも暗いのだから。

あれから泣き枯らしてそのまま眠ってしまったエヴァを抱えたまま、その日はそこで寝た。

そして夜が明けて今日。

起きた時に状況に気付いたエヴァがワタワタと慌てている姿を見てほっこりした俺は、とりあえず彼女に最終確認を取った。

「俺と来るか？」

「うん！」

即答だった。どうやら俺に少なからず心を開いてくれたようだ。その後も俺が持っていた干し肉などを朝食にして世間話をした。その中で、エヴァと呼んでほしいと言ってくれたので俺もライと呼んでくれと伝えた。ただエヴァからは「兄様と呼んでいいか」と聞いてきたのでそっちで許可した。家族愛に飢えていたのだろうか。

ちなみに彼女の年齢は今年で18歳らしい。およそ8年も一人で細々と生きていたということになる。まったく逞しい少女だ。

彼女のことを聞いた後は俺のことも話しておいた。

自分は吸血鬼でも、吸血王という少し変わった存在だということ。

吸血鬼が集まって住む里があること。

そこに両親がいること。
いつかエヴァを連れて行ってあげたいと思っていること。
でもその前に旅に付き合ってほしいということ。
生い立ち以外にこれからのことも彼女に関係することで教えたのだが、俺と一緒に行けるならどこでもついていくとのこと。
なんと健気なことを言ってくれるんだ。感動したぞおい。
さて、そんなことを話しながら俺は急ぎの本題に入ることにした。
「いいかエヴァ。吸血鬼にとって『飢え』とは特別な意味を持つ」
「特別？」
「そうだ。だいたい予想は付くだろう？　ようは血だ」
「!?…うん…」
吸血鬼が喉の渇きを満たすにはやはり人の血を飲むのが一番だ。
動物の血でも一時のしのぎにはなるが、やはり吸血鬼にとって『上手い』と感じるのは人間の血。それに動物と人間では吸血衝動を抑えるのに必要な効力がまったく違う。
人間の血を吸うことは吸血鬼が生きて行く上で切っても切り離せない本能なのだ。
もちろんその本能は俺も持っている。俺は吸血王だからそれほど頻繁に血が必要になるほどではないが、２０年の間に一度だけ血を吸ったことがある。それもその吸った

人間が干からびるまで。
　吸血衝動を抑えるにはそれなりに量が必要なのだ。補足するが、下僕にする時とはまた違うと明言しておく。誤解されがちだが、人間を従える時は逆に吸血鬼の血を牙を通して人間の体内に流しこんでいる。そうすることで支配下に置くことができるのだ。まぁこの話は父からの受け売りだが。
　この吸血衝動は定期的にやってくる。俺のような特別な種でなければ、吸血鬼としてそれを我慢することはできない。
　しかしエヴァはこれまで人間に噛み付いたことは一度もないという。
　むしろこれまでよく我慢したものだ。確かに子供ということもあってそこまで吸血衝動が起こらなかったにしろ、人を見て血が騒ぐといったことがなかったのだろうか？
「最初は抵抗を感じるだろう。だが、吸血鬼である以上必ず通らなければならない道だ」
「……兄様も通ったの？」
「もちろんだ」
「……わかった。がんばる」
「いい子だ」
「うん……」
　なんだかエヴァの頭を撫でるのが俺の癖になって来ている。だって触り心地がいい

んだもの。サラサラの金髪に指をからませながら撫でるのは一種の快感だ。

……言ってて変態みたいだと自分で思った。

それはともかく。

エヴァも決意をしたところで、俺達はエヴァの初吸血に向かうことにした。

と言っても俺とは違いエヴァは吸血鬼としての弱点の一つである陽の光を克服できているわけではないので、暗い森の中から獲物を物色しなくてはならないのだが。

これは俺の個人的な見解なのだが、おそらく吸血鬼は血を吸うたびに少しずつ弱点が薄まっていくのではないかと考えている。

吸血鬼として完成していくことで、徐々に種としての弱い部分を克服していく。ゆえに歳を重ねた俺の父のような長生きの吸血鬼は、人間と変わらぬように日の光の下でも普通に生活できるのではないだろうか。

そして若いエヴァではまだ日を遮る障害物なしに、太陽の下を歩けない。夜まで待ってもいいのだが、そうなると今日の仕事をさぼってしまった（エヴァと話し込んでいたので時間を忘れていた）関係で、この街から今日中にとんずらするという俺の目的が果たせなくなる。

だからエヴァが昨日盗みを働こうとした時と同様の場所で、なるべく陰からでないように犯行に及ぼうということになった。

「来たぞエヴァ。あの男にしよう」
しばらくじっと伺っていると、商人らしき男が一人で歩いてきた。
不用心だなと思ったが、軽装なのでおそらくこのあたりを散策して薬草などを探しているのだろう。ちょっと出かけるという気持ちで外に出てきたに違いない。
エヴァにとっては運が良かったと言えるだろう。
「わ、わかった。兄様見ててね？見ててよ？」
「ああ。落ち着いて行け。大丈夫。盗む時とほとんど同じ要領だ。あいつの影からそっと出て、首元に牙を突き立てて思いっきり吸うだけ。簡単だろう？」
「う、うん。じゃあ行ってくる」
不安そうな表情は隠せないが、それでも気合を入れるように勢いよく自分の影の中に入っていた。
大丈夫さエヴァ。お前にとっては不本意だろうが、吸血衝動時期で目の前に美味しそうな人間の血があったら、吸血鬼としての本能が理性を上回る。
初めてならなおさら押さえられないだろう。
俺の考えの通り。
ガプッ
「はへ？……ぎゃあああああああああああああｒヴぁ※ｗえお※ふぁいｖｃへ――――

「!!!

迷わずエヴァは。

男の首にむしゃぶりついた。

ようこそエヴァ。

吸血の世界へ。

6話

俺とエヴァはエヴァの吸血衝動からくる『飢え』が収まったことを確認した後、すぐに旅立った。

そして今現在、最初の名も無き街から出て西に進んでいる。二人仲良く手をつないで。

……仕方ないだろう。エヴァが繋ぎたそうにチラチラ上目遣いでこちらを盗み見ていたのだから。

おかげで今エヴァは非常に上機嫌だ。スキップを始めそうにウキウキと歩いている。

さて、なぜ西に進んでいるのかというと。

酒場で聞いた戦端を開いたという国に向かうためだ。

もちろんそれにも理由はある。

「ねぇ兄様」

「なんだエヴァ？」

「次の街まで早く行きたいならあの時の転移魔法つかったらいいんじゃないの？」

エヴァが言ってるのはおそらく彼女を盗みの現場から遠ざけた時に使用した魔法の

ことだろう。
たしかにあれを使えば今より早く道程を進むことはできる。
しかし。
「エヴァ。俺はこの歳になるまで里以外の場所などあまり見たことがなかった。『世界を見る』というのも俺の旅の目的の一つなんだ。だから別に急ぎの旅でもないならゆっくり歩いて行くのも旅の醍醐味だ。そうだろう？」
「……うん！そうだよね」
そう答えたエヴァだが、まだ表情が納得できていない。
なぜだろうと、俺はエヴァの境遇にあてはめて考えてみた。
そうか。
「エヴァ。俺は強いぞ？」
「え？」
「大抵の相手なら一瞬で蹴散らせる。だから不安に思うことはない。今だって日の光を浴びながら苦しくないし動けているだろう。他にも色々俺はできることがあるから、エヴァは心配しなくてもいいんだぞ」
エヴァはこれまで人と接触を避けて生きてきた。
それは自分が人と相いれない存在だと分かっていたからだ。

そして万が一自分の正体が吸血鬼だとばれれば、どうなるか分からない。
死ぬことはなくても、いや。死ぬことはできないからこそ、どんな苦しみを味わうか想像できない。
だから常に周りを気にして生活していただろう。
ゆえにこんな白昼堂々天下の往来を歩けるなんて夢にも思ってみなかったに違いない。
だがこれからは俺がいる。
既に牙を隠すことのできる俺と同じ偽装魔法をエヴァにもかけた。これで吸血鬼だとばれる確率は低くなる。
光学迷彩と同じような効果をもたらす光系統魔法《反射》の応用で、エヴァに注ぐ光を目に見えない膜で遮るように張った。これで日中でも好きなところを歩き回ることができる。
「俺の魔法が信じられないか？」
「そんなことない！　私は兄様を、兄様の魔法を信じてる！　でも……」
「恐いか？」
「……ごめんなさい」
「いいさ。少しづつ馴れていけば。それにお前が望むなら魔法やその他諸々の手ほどき

もしてやろう」

「ほ、ほんとっ？　いいの？」

「ああ。むしろ俺と旅をするということはかなり危険なことに巻き込まれる確率高し、だぞ？鍛えなければ簡単に死んでしまう。まぁ俺は死ぬことはないだろうか、エヴァはまだ死に至る弱点もあることだしな」

「そう、だよね。うん。私がんばるから！」

エヴァの表情は先ほどまでの不安そうな顔から決意をした顔になった。

とりあえず不安を取り除くために明確な目標を示してあげたが、思った以上にやる気を出してくれているようだ。

ここまで俺の信頼に答えようとしてくれると、若干恥ずかしいが。

だが俺の告げたことは真実だ。

俺はこれから戦いの中に身を置くつもりだ。

酒場でも少し考えたことだが、やはり戦争に介入したいと思う。

その報償で地位はやっぱりめんどくさいので遠慮するとしても、名声を手に入れて金を荒稼ぎしようと考えたのだ。今後は二人分の生活費がかかるし。趣向程度の感覚だが、良いものを食べ、良い所で寝たい。それもひとつの幸せだろうと思う。

だがそんな中、戦場に今の状態のままエヴァを連れていくことはできない。

少なくとも自分の身は自分で守れるぐらいにはならなくては。
これは何も金を稼ぐためだけにそう言っているのではない。
あるいは俺と離れ離れになってしまった時、吸血鬼として人から害されても自分で対処して跳ね返せるようになっておかなければ危ない。
いつ吸血鬼の弱点を突いてくる魔法使いや人間が現れるとも限らないのだから。
荒療治だが、実戦から入って学ばせていこう。そうすれば小金を稼ぎながら訓練もできるという一石二鳥。
既に下地はこの8年でできているようなので、数か月の間に目覚ましく成長していってくれるだろう。
そう結論を出したので、俺は今戦火の絶えないであろう土地へ向かっているのだ。
考え過ぎなのかもしれないが、エヴァは18歳といえどまだ無垢な子供のような存在だ。見た目も真祖は吸血鬼になった時の背恰好が維持されるので幼い印象を増している。
そんな彼女は、安心と家族愛的なものを提供してくれた俺に対して精一杯答えようとしてくれている。
それが空回りしないように監視しながら、彼女の成長を促していきたい。
それが彼女の身を預かる俺の使命だ。責任は果たして見せよう。

そんなことを考えながら俺はエヴァの手を引いて道を進んでいく。
この先に戦いが広がっていようとも。
俺は魔法が大好きだから。
魔法は奇跡だと信じているから。
……まぁ単純にそろそろ、『魔法を使いたい病』が発生してきているだけなのだが。

「くくっ。《雷の暴風》」
「な、なんだこれはぁあああ！」
「ははっ！《闇の吹雪》」
「や、やめ――――――!!」

巨大な雷の竜巻とすべてを氷原に変える吹雪が地面を抉りつつ、兵をまきこんで荒れ狂う。
吹きとばされた人間達は、腕や足、首が千切れる者。飛んできた拳大の石に穴だらけにされる者、落下時の衝撃で息絶える者。
俺の魔法によって様々な死がそこには広がる。
俺は今、まさに戦場に立っている。

あれから次の街に向かっていた俺達は、たまたま途中で出会った商隊と合流し、護衛代金の代わりに一緒に街まで連れて行ってもらうことになった。
ついでにその時商隊の荷物から交渉して、ぼろ布みたいな服を着ていたエヴァに服を買ってあげた。
茶色のワンピースのようなもので、薄着のような気もしないではないが、気温など吸血鬼にしてみればあまり関係がないのでいいだろう。エヴァもはしゃいで喜んでいたし。

それからしばらくは何事も起こらず、俺としては盗賊の一人でも襲ってきてほしいと願う時間が経っていった。

まぁ仲良く、まるで本当の兄妹のようにエヴァとおしゃべりなどをしながらこれはこれで楽しく過ごしていたのだが。

「……ね!!……っ!!」

「……さ……!……!?」

「ん?」

俺はその聴力でかすかに人の争い合う、鉄同士が打ち合わされる音を拾った。

これはこの先でなにかあるなと思った俺はそれを商隊のリーダーに告げ（こいつは話が分かる奴だった）、とりあえず俺が一人で先行して様子を見てくると言って集団から離れた。

エヴァもついてくると言ったが、今回は我慢してもらうことにした。俺から離れるのは恐いだろうが少しの間だけだからとなんとか説得した。

そして俺は思わず不謹慎にも喜んでしまった。

目指す街がその先にある草原では。

俺が到着したまさに今。

戦争が行われていたのだから。

こういった経緯で今俺は戦場のど真ん中にて、魔法を連発しているというわけだ。
こいつらを排除しなければ進めないわけで。
だから遠慮はいらないと思った。
「やはり魔法はすごい。《魔法の射手　光の一矢》」
「この化物め！　死ねがはっ！」
背後から剣で襲いかかって来た男の心臓に魔法の射手を撃ち込んだ。
鎧をものともせず貫いた魔法、《魔法の射手》は汎用性の高い魔法だ。
俺ほどの魔力があれば、超遠距離からの狙撃にも使えるし、無詠唱なら早撃ちもできるので接近戦にも使える。さらに何柱も一斉に撃ちだすこともできるので本当に便利な魔法だ。
「な、なんなんだ貴様は！」
「ん？　俺か？　俺はな――――」
俺が敵味方関係なく暴れていたのを見て、争っていた一方の指揮官らしき男が驚愕と

恐怖に染まった表情で叫んだ。
すでに両軍とも死屍累々。草原につめていた数百からなる人間の死体の山が積み上がっている。
生き残っているのは中央より少し後方で全体指揮を採っていた指揮官とその護衛ぐらいだ。
そんな逃げても誰も咎めないであろう状況になってもまだ、叫び問い質す勇気があるこの指揮官に敬意を表し、俺は正直に答えてやった。
「吸血王さ。《雷の斧》」
「なん――――――」
ドガァァァン！
「ここは戦場だぞ。名を答えてやっただけでもありがたいと思え」
聞かれたことには答えてやった。だから後は他の兵と変わらず一撃で吹き飛ばして終わりにした。
さて、エヴァが待っている。はやく帰ってやろう。
しかし久々に思う存分魔法を使えてよかった。
やっぱり魔法って楽しい。
ちなみにこんなこと思ってるが、同時に俺は冷静に戦いを進めていた。

魔法を見た者を生かして返すわけにはいかない。
魔法は秘匿されて置くべきものだ。まだ、な。
だから後始末はしなくてはならない。
今回は既に周りに偵察や監視の兵が残っていないことも確認済み。
地面に残る破壊痕は戦闘があったのだからあって当然と思うので残しても問題ないだろう。
なら後はここにある死体を消せば万事解決。
「闇に沈め。《奈落》」
ズゾゾゾ、と地面に闇が広がる。
そして俺が指定した対象物（今回は死体）を引きずりこんで消えていく。
そして後には戦闘があったとだけ分かる草原が、風に揺れる。
「……俺は俺のために、俺の大切な人のために人を殺す。魔法で殺す。そこに躊躇いなどない」
俺はむしろ、こんな惨劇を生んでおいて何も後悔などが湧かない俺自身が心配になってきた。
なんか俺。だんだん本当に化物になってきたような……まぁいいか。
深く考えるまでもない。

俺は俺の意志で。
魔法を楽しむと決めたのだから。
肯定してくれるなら共に楽しみ。
否定するなら互いに争おう。
それが世界の理なのだ。

7話

あの大殺戮劇から数か月。

俺は確かに戦乱の世の到来を感じていた。

商隊に礼を言って別れた後も、街や村を転々とした。

もちろん俺の名を売るための活躍の場、エヴァの修行の場を求めて、だ。

とりあえず戦争を吹っ掛けた国と吹っ掛けられた国どちらの陣営にも味方をせず、まとめて蹴散らすことにした。より俺達を高く買ってくれる国に雇われるためだ。雇うのもためらうほどにやりすぎないよう自重はしながらだが。

これは最終的に雇ってもらうための計画段階の最初のひとつにすぎない。

もちろん攻撃する時は、今度は全滅させてしまうわけにもいかないので（生き残りから俺達の噂が広まらなければならないので）、あからさまな魔法は使えなかったが、それでも見えないところで使用した。

前提として俺は魔法以外も人外なので、魔法抜きでも純粋な剣技や体術で問題はなかったのだ。

ちなみに本格的に暴れ始めると決めた後、エヴァと相談して変装することに決めた。

俺のオリジナル魔法《蜃気楼（ミラージュ）》。
これは体全体に掛けられる高度な変装魔法だ。
姿形を完全に好きに変えることができ、触り心地も見たまんまになるすぐれものなので、結構自慢の魔法である。
なぜ変装をしようと思ったのか。
その理由は一言で言えば「面倒だったから」だ。
俺はこれから自分の活躍が噂になるように動くとなった時、もし思惑通りに事が進んだ場合、普通に街中を歩いているだけで、馬鹿なことを考える輩や、尾行などをしてくるやつらが出てくるのではないかと考えている。いやこれは確信だ。
なら噂になるほどの目立つ行動をする時に変装しておけば、有名になるのは変装後の姿になるわけで。俺達に実害はなくなる。
そもそも外出が多い俺達は、普段からよく街の中で食べ歩きや修行のために森の中を部隊を探してながらフラフラしていることが多い。そんな時にまで本来の外見のままでいたために付きまとわれたら。
正直うざいにもほどがある。
わざわざ変装のためだけに魔法を使う時間が増えると言うのは俺としては楽しくないし。

だったら目立つ時に変装してた方がまだマシだ。別に外見がどうだろうが噂が結果的に広まれば万事解決なのだから。

現在俺の姿は赤が濃い茶色がかった髪で３０代後半くらいの筋肉隆々な傭兵オジサン風。

エヴァは年代は元のエヴァと一緒にして、茶髪のどこにでもいそうな村娘風。

もしもの時に親子という設定でいけるようにした結果こうなった。もちろん人前ではエヴァに俺のことを「パパ」と呼ばせることも忘れてはいない。なんだろうこの呼ばれた時の何とも言えない気分は。

装備についてはさすがに丸腰では（大丈夫でも）世間体的にまずいので新調し、おそろいのちょっと高価な銀鎧を胸や太ももなど大事な所を守るように服の上から着ている。

さらに暴れ始めて少し経った後。

俺は優勢に戦争を進めている吹っ掛けた側の国、モラヴィア王国に味方することに決め、その後は一切モラヴィア王国側に手を出すのを止めた。

これも計画の段階を踏んでいるにすぎない。

ようやく最近になって噂になり始めているようで、戦場近くに行くと、他の傭兵や兵隊らしき奴らに目線を向けられる。子供連れだというのが目立つからだろう。

しかもこの見た目のせいなのか、変な通り名までついた。
『紅蓮の殲滅者』。
見たまんまじゃねえか！と思った俺は悪くないだろう。まぁ変装の効果が出てると前向きにとらえることもできるが。
エヴァは人目があるところでは陰に隠れているように指示しているため、今のところせいぜい「紅蓮の殲滅者のおまけ」程度の存在だ。
「エヴァ。そろそろいくぞ」
「うん、兄様」
さて、それじゃあ今日はエヴァの修行にでも行きましょうか。
今俺達がいるのは最前線に一番近い補給拠点ともなっているこの国でも2番目に大きな街だ。
そこの高級宿屋の一部屋をそろそろ1週間になるであろう期間借り続けている。
これまでは一か所に留まることで、噂を聞きつけて人が集まってくるのを避けるため2，3日で移動を繰り返していたのだが、そろそろいいだろう。計画も最終段階。
十分俺の強さは広まり、国としてその場契約ではなく正式に戦力として雇いたくなってきただろう頃合いだ。
いずれ近いうちに王国側から接触があるはず。むしろそれが狙いでまわりくどいこ

とをやってきたのだ。
だってやろうと思えば国の国庫に入りこんで強奪することだってできたし。でもそれじゃあ魔法の使い方としてはつまらない。
「今日はどうするの？」
「金には困ってないし、傭兵としての報奨金よりもエヴァの勉強の成果を見たいな。適当な敵部隊を探そう」
「わかった。がんばるね！」
だが、ただ接触を待っているのももったいない（魔法に関われない的な意味で）。
俺は今回何もしないが、エヴァの魔法を見せてもらおう。彼女の魔法は真祖の吸血鬼だからというのもあるだろうが、才能に満ち溢れていて、美しいのが特徴だ。
何と言えばいいのか。俺の魔法は父譲りで若干荒々しい。悪く言えば大雑把だ。母に理論も習ったとはいえ、こと戦闘に関しては父と濃密な時間を過ごした俺は、あるいはなるべくしてそうなったのか。
簡単に言えば、威力さえ出てしまえば細けぇこたぁいいんだよ（父談）、である。
対してエヴァの魔法は、俺が師匠にも関わらず魔法陣やそれに流し込まれる魔力が繊細に組まれている。
一種の芸術と言っていいだろう。

簡単に言えば、魔法の理想形がここにある（俺談）、である。
だから訓練の成果を見たいと言いつつも、それを言い訳にしている俺がいるのである。
早く魔法が見たい。

「エヴァ！」
「うん！　リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹雪け常夜の氷雪。《闇の吹雪》！」
俺の合図で固まったままこちらに突撃の姿勢を見せていた騎馬軍団に、エヴァの呪文詠唱で撃ちだされた《闇の吹雪》が襲いかかる。
「紅蓮の!?　て、撤た――――――」

ズシャァァァァァ！

最近また威力が上がってきたエヴァの魔法の前に、数十からなる騎馬兵の群れは食い散らされた。

相手が魔法使いや銃火器で武装した近代の軍隊ならいざ知らず、槍や剣や弓などで武装しただけの今の時代の人間では、最強種のひとつである真祖の吸血鬼エヴァンジェリンの相手にならない。

「修行の成果が出てるな。それにやっぱりエヴァの魔法は綺麗だ」

「うん。ありがとう兄様」

褒められてうれしそうに「えへへ」と頬を染めて笑うエヴァ。

顔まで返り血に濡れたままだ。これもまた綺麗な笑顔だと言える。

（この子も染まってきたな）

良い傾向だろう。かつて出会ったばかりのころは世界のすべてに怯えているような態度だった少女も。

今では前線で立派に胸を張って戦える強い少女へと変わったのだから。

数か月という短い期間の中でも、自信がついてきたということだろう。

それに最近なんだか――――

「そ、それで兄様。ご褒美の……その……キスは？」

「……」

自信の付き方がおかしな方向にいってるような気がしないでもないというかなんというか。

つまりだな。

「……ん」

「チュッ……えへへ～」

いったいどこで彼女の気持ちを後押ししたのだろうか。

守ってあげたから？

安心を提供してあげたから？

快適な生活を過ごさせてあげたから？

修行をつけてあげたから？

吸血鬼としての彼女を肯定してあげたから？

目の前で笑いながら圧倒的な力で敵を薙ぎ払ったから？

頭を撫でてあげるのがくせになってやめられなくなってたから？

俺は。

俺はこれからも同じベットで寝ていく中で、自分の理性を保ち続けることができるのだろうか！

むしろ寝るときになるたび期待に目を輝かせてこちらを見てくる「待ってます光線」にそろそろやらせそうだ。

父よ、母よ。

俺はどうしたらいいのだ。

8話

「……ん？…朝か……」
俺は眠りから覚め、ここ一カ月ほど見続けている宿の天井を仰ぐ。
これだけ同じ場所に留まったのもそうないな。
「……んっ」
「……ああ……そうだった」
これもいつも通り、俺の隣にはエヴァが眠っている。
何度かベットを別にして眠ることを推奨したのだが、そのたびにエヴァに猛反対され、結局いつも同じベットで寝てきた。
なので目を開けた時、隣にエヴァがいるのは不思議でもなんでもないのだ。
ないのだが。今日は別の意味を持つ。
「ふぁれ？　兄様おはよ～」
そう朝の挨拶をまだ眠たそうに目をトロンとさせたまま言ってくるエヴァ。
素っ裸で。
……綺麗だな。

まぁなにが言いたいかと言うと、つまり『そういう』ことだ。
大丈夫、彼女はもう１９歳になろうという娘だ。手を出しても何も問題ない。見た目はどうあれ。
というか俺は基本的に女の子の年齢は気にしないタイプだ。
上だろうが下だろうが、俺が気に入った、あるいは俺を好いてくれる女性なら俺は受け入れる。
もちろん限界はあるが。俺にだって好みのタイプぐらいある。男だし。
「えへへ～。にいさまぁ～。ギュッ」
「……」
まぁ色々言ったが。
後悔などあろうはずもない。
エヴァを守りたいという気持ちは変わらずあり、そして愛おしいとも思っている。
それを彼女も俺に対し抱いてくれていたと言うなら。
体を重ねたいと願うのは男女の間では当然のことだ。
「あらためて。おはようエヴァ」
「おはよう兄様！」
そうこれは。俺のこの世界での生に。

初めてのパートナーができたという。
ただそれだけの話だ。

「貴様が『紅蓮の殲滅者』とか呼ばれている傭兵か」
「はい陛下。その通りでございます」
あれからまたエヴァの裸身に興奮してしまい我慢などするはずもなく、朝の第二ラウンドに突入してスッキリした後、二人して魔法でシャワー的なのを浴びていると、部屋に宿の主が来客を知らせに来た。
「ついに来たか」と思った。
そして案の定俺を訊ねてきたのは護衛騎士を二人従えた王国の文官。
まぁこの時代にありがちな傭兵風情がと偉そうに上から目線の文官のなにが言いた

いのかよく分からない文句をまとめると。
「王が呼んでるから来いや」
ということだ。
最初からそう言えと。
あやうくキレて、うっかり細切れにしちゃうところだっただろうが。エヴァが涙目になりながら、小さいからだを精一杯使って押さえてくれなければ本気で危なかった。
そんなことがあり、迎えの馬車（ちなみに俺はボロ馬車で文官は豪華な馬車）に乗せられて王城へ参内し。
今モラヴィア王国国王と向かい合っている。
「ふんっ。傭兵ごときが生意気な」
会う前から文官の態度で絶対国王も嫌な奴だと思っていたが、やはり傲慢な王だった。
そもそも噂じゃこの国の第一王子が隣の国の王女様を手に入れたいなどとという我がままを言ったことが、この戦争のはじまりだという。
チラリと目線だけ、ばれないように王の隣に座る王子に向けると。
そこには豚がいた。
確か事前に確認した情報によると、この国の第一王子は18歳だとのことだが。

どう見ても３０歳越えのおっさんにしか見えない。
これでもかと肥え太った腹。脂ぎった肌。顔に至ってはもう鼻とか目が脂肪の奥に潰されて、臭いをかいだり、前を見たりできるのかと逆に心配になってくるぐらいだ。
……噂が真実っぽいな。
なんか見た目からしてやらかしそうな顔をしている。
まぁ愚かな親からは愚かな子供しか生まれないし育たないということだろう。
俺には関係のない話だ。
金さえもらえれば文句はない。多少のことには目をつぶろう。
エヴァを連れてこなくて良かったな。あの色ボケ王子に目をつけられたら厄介だった。
最悪この国を消滅させなければならなくなっただろう。
俺の女に手を出したら殺す。
それは当然の報いだからな。
俺は自分のモノが害されるのが心底嫌いだ。
それが人であれ物であれ、一度俺の手の中に入れたものは、なにがあろうと渡さないし、万が一それを奪おうとしたり、壊そうとしたら。
生き地獄を見せた後。

惨たらしく殺してやる。
「まあよいわ。貴様に命ずる。我がモラヴィア王国のために戦え。報酬は金でも女でも好きなだけやろう。ただし勝利せよ。噂がただの噂でないことを祈っておるわ」
「はい陛下。御意にございます。報酬は純金でお願いします。貨幣では――――――」
「黙れ！　そんなことは文官に言え傭兵！　これ以上お主と話などしとうないわっ！　穢れる！　下がれ！」
「……御意」
この糞ジジイ。俺はただ自分の魔法という力を存分に使えればいいんだよ。ついでに金と伝説になるぐらいな名声を得たいというのもあるがな。
最近俺は魔法を使うにしても、ただ使うだけではもったいない気がしてきていた。
もちろん魔法を使うことが一番大切だし楽しいのだが。
どうせなら、この魔法で幾多の伝説を残してみたい。
それができるのが吸血王たる俺だ。
歴史に名を刻むのも一興だろう。
でもまぁそう考えると魔法世界の方が住みやすそうな気がしてくるな。考えておくか。
あっちなら魔法を使っても不自然ではないし、なにか案を考えれば色々とおもしろい

生活が送れそうだ。
永住も視野に入れて本気で考えてみるか。
もちろんエヴァの意志も確認してからだが。
だから覚えておけ愚かなる人間の王よ。
搾り取るだけ搾り取った後。
肉塊にしてやる。
せいぜいこの戦争に勝った後の輝かしい未来予想図でも妄想しているがいい。
まぁ大丈夫さ。俺が勝たせてやるから。
でもな。
最後に笑うのは俺一人だ。

9話

「や、やめてくれ。これ以上は！　他のものならなんでもやる！　だからっ」
「悪いがそうはいかない」
グシャ。
また一人。人が『潰れた』。
俺はただ背負っていた大剣を目の前の少年に振り下ろしただけ。頭から股の下まで一直線に叩きつけたらこうなった。もちろん腹で叩いたので挽肉みたいに潰れるのは予想していたが。
だが俺からすればたったそれだけの作業で。脆い人間の肉体は。肉片に作り変えられた。
文字通りバラバラに。
おかげでまわりは大惨事だ。高価な絨毯が敷かれている床一面が真っ赤になってしまった。
俺の服にもそいつの押し出された目玉が飛んできて血がこびりついてしまった。
まぁこの程度、魔法で綺麗になるので後で落とせばいいだろう。

「あ、ああ……クリス！　クリスッ！」
「無駄だ。お前の息子、シーラス王国第一王子クリスは死んだのだ」
「ッ!?　この悪魔めがぁ！」
「黙れ」
　ガスッ！
「があっ！」
　いいかげんピーピーうるさいので、俺は現在モラヴィア王国と戦争状態のシーラス王国の国王を鞘で殴り飛ばした。
　手加減して腹を強打したので、気を失うことはないだろう。
　もっとも。彼からすれば気を失いたかったかもしれないが。
　しかしまだこの男には用がある。
　生きて捕らえて報奨金の足しにもなってもらわないといけないし、なにより。
「問おう。第二王女セシリアをどこに隠した」

少し時間は遡り。モラヴィア国王との会談の後の話。
俺は宣言通り絞れるだけ搾り取ることにした。
こちらの突きつけた報奨金の条件は簡単だ。
一つの戦に出るだけで払え。大将級を殺ったら払え。街や村を占領したら払え。王族などの重鎮を捕らえたら払え。
そして王子の目的の王女を捕らえる事ができたら特別手当を出せ。
もちろん最初は文官も俺のことを下に見て要求を跳ね返してきた。
安く使い潰す魂胆が見え見えだ。
しかし。
交渉役の無駄に偉そうな文官をちょっとおちょくったらあっさりうなずきやがった。
ちょろいな。俺はただ「傭兵風情に小金も払えない情けない貴族もいたのか」といった趣旨のことを言ってやっただけなのにな。ククク。

奴もあれよあれよという間に、結構多額の報奨金の約束を取り付けられていたことに交渉が終わってから気付いていたな。

あの顔は傑作だった。

それでも俺がこんな大手柄を立てることなどできないと高をくくって自分を納得させようとしていたようだが、無駄だ。

俺を常識の範疇で考えては痛い目を見ることになる。それを教えてやろう。

金の支払いについては心配していない。

その理由は二つある。ひとつは、そもそも払えないほど、国の経済が傾くほど要求したわけじゃない。少し無理すれば払えるレベルを選んで突きつけたからな。

第二に、プライドの高い奴は一度自分で言ってしまったことは死んでも守る人種だ。そういう意味では信用はできると言っていい。

俺は俺の思い通りに交渉終えられたことに満足し（若干王への仕返し的な意味も含んでいたので）、エヴァの待つ宿へと帰った。

そして俺は交渉後、エヴァを連れて（一緒に戦いたいと涙目で甘えてきたので負けた）さっそく戦争地域を回った。

ある東の戦場では。

「死ね」

「がぁあああ！」
「ぐぼぁっ」
俺の剣一薙ぎが数十の敵兵を薙ぎ払い。
ある北の戦場では。
「じゃま！」
「こんな、こんなガキにいいいいい！」
エヴァの弓矢が連射で幾人もの人間を同時に仕留める。
吸血鬼無双。人外の力を魔法というさらなる力で底上げし、戦術や作戦が意味を為さない、敵からすれば理不尽極まりない存在が暴れまくる。ちなみにエヴァが戦っているのはすでに紅蓮の殲滅者の弟子と公表したからだ。一緒に戦いたいという望みをかなえるためにそうした。
そんな俺達のせいでもはや戦線などあってなきもの。
相手国であるシーラス王国軍には同情を禁じ得ない。
そもそも距離という概念が魔法によって消えている俺たちにとって、奇襲など無意味であり、いくら俺達の後ろを突こうとしても無駄な結果に終わる。
相手にとっては悪夢のような戦いが続くが、これも運命。
俺のお眼鏡に叶わなかったのだ。甘んじて滅びを受け入れるがいい。

こうしていくうちに結果的に幾人かの将軍の首級を挙げ、いくつかの砦や街を奪い取った俺たち。報奨金も約束通りたっぷりもらった。しっかり証拠を突きつけて言い逃れできないようにしてやったからな。

しかしこの結果は当然だ。

俺にとって、いや俺とエヴァにとって。「敵」と呼べるものなど存在しなかった。

まわりを飛びまわるハエを払うがごとく。

たんたんと敵国からの湧き潰しを行っていった。

本当に俺たちにとって、この時代の人間はその程度の認識なのだ。

例えばだ。

人間だって。その日踏んだアリのことをいちいち数えていたり覚えていたりしないだろう？

そういうことだ。

特に俺に限らず、最近エヴァも順調に常識から足を踏み外し始めているため、本当に手に負えないだろう。

そんなことを繰り返している間に、あっという間に決戦。

シーラス王国がとうとう王城まで追い詰められ、最後とばかりに持てるすべての戦力を王城前に結集した。

対するモラヴィア王国は俺達の活躍によって節約されていた兵力をこちらもすべて投入。

その戦力差は5倍以上となっていた。

まぁほとんど俺とエヴァのせいだけどな。

だが俺はこの決戦では前線に立つことはない。

なぜなら他に用事があるからだ。

しかしこの頃になると、前線の兵達にとって俺とエヴァはまさに神様のような存在になっていたらしく。俺達が参戦すれば勝てるとまでいわれているため、すさまじく戦いに出てくれることを熱望されているような状態なのだった。

しかし出ない。そんな勝手な都合に付き合う義理はないだろう。だいたい傭兵に全軍の指揮を高めろとか命令されても、それは俺の役目じゃないだろうに。それに名声を残してもらうだけの活躍はすでにしているので、別にもう頑張る必要はない。

だが、あとひとつやり残したことがある。

俺は搾り取ると決めた。

だから俺のこの決戦での第一目標は。

自害される前に。

王女含めた王族連中を見つけ出すことだ。

「もう一度問う。王女はどこだ」
「誰が教えるものか！　ワシは死んでも絶対に口を割らんぞ！」
せっかく裏技（魔法）を使って城に忍び込み、前線での決死の戦いをしている敵兵を避け王城内に直接入りこんだというのに。
肝心の王女がみつからないとは。
そのかわり国王と1人の王子を見つけたが。
もういっそこの国王に暗示にかかる魔法でも使ってやった方がはやいのだろうか。
「兄様。見つけた」
「ああ。ありがとうエヴァ。でもできればもう少しこの爺さんをいじめたかったな」

「性格悪いよ兄様」

めっ、とエヴァが人差し指を立てて「私怒ってます」アピールをしてきた。
なにこれかわいい。
おっといかんいかん。
今は王女探しが最優先だ。
今の話から分かる通り、俺は国王で遊んでいたため（だってここ最近戦いばかりで気持ちがやさぐれていたのだ）、利口なエヴァが俺のかわりに魔法で熱源探索をしていてくれたようだ。
それも俺のために。なんて健気な娘だ。今夜も可愛がってやろう。
「な、なにをいっておるのだ！　そんな簡単に見つかるものでは――――――」
「残念。これが見つかるんだな。魔法で」
「ま、魔法だと？　頭がおかしいのではないか?!」
「そう思うか？　なら後ろを見てみろ」
「は？……なっ！　ク、クリス!?」
「……」
どうせこの後こいつも俺の下僕にするので見せてもいいだろう。

そう。こいつ『も』と言ったように。

俺はすでに殺す前から王子を噛んで下僕にしていたのだ。

報奨金が支払われる王族を俺が自ら殺すわけがない。つまりは殺しても死なないのでよかったということ。潰れても再生させれば良いだけの話だし。

王女の居場所を吐かせる脅しにも使える上、それで殺しても死なないのでこのままモラヴィア側に差し出せば報奨金ももらえるという俺に都合がいいことばかりだな。

下僕にされた人間は見た目は普通の人間と変わらない。せいぜい噛んだ首筋に噛み跡がのこるぐらいで、後はこちらの命令どおりに人間らしくふるまうこともできるのだ。モラヴィア王国側に差し出したところで誰もすでに死んでるだなんてわかるまい。

「さて。王女の居場所もわかったし、俺も十分楽しんだ。そろそろ貴様も逝っとくか？」

「く、来るな化物！　お前たちはいったいなんなんだ！　クリスッ！　目を覚ませクリス！　おのれぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

ガブリ。

この日一つの国が滅んだ。

歴史書には他国との戦争に敗れたためと記されているがその実。

一般に伝わる伝説の中には、その戦いで最も活躍したひとりの傭兵が登場する。
紅蓮の殲滅者。
彼は千の敵を打ち払い万の敵を恐れさせた英雄だ、と。
こうしてシーラス王国は。
裏で暗躍した吸血王によって滅びを迎えたのだった。

１０話

「しかし儲けたな」

「キンピカ～」

国王に加え豚王子ご所望の王女様を捕らえた報酬は思った以上に多かった。

まぁそうなるように交渉したのは俺だが。というか王子がすごいご機嫌で父親にたんまりと払うよう口添えしてくれたのも大きかった。

そんなに価値のあるものかね。あの生気のなくなった人形みたいな目をした女が。

あ、ちなみに王女は噛んでないからな。あれは生身の人間のまま渡した。そういう意味で生気がないのではなく、あれは目の前でモラヴィア国王に父親がなぶり殺しにされたせいだ。もちろん俺の下僕になっていたので俺の力で再生はできるようになっていたがそんなことするわけない。そのせいで王女は精神が壊れた人間になってしまったということだ。

約束通り計８つに袋詰めされて渡された（ひとつ４０kgぐらいあったので頼んだら王子が馬車もくれた）純金の金の延べ棒の山を受け取り、俺達は王城を後にした。ちなみにもらったはいいが馬車は正直移動の邪魔なのでエヴァの影の中に金ごと収納してあ

る。

まぁお礼に置き土産をしてきてやったが。

今は王都から外にでるために、大通りの一つを門に向って歩いているところ。すでに時刻は夕暮れ。戦勝に沸くこの都は寝静まることなく、むしろ夜も近くなってさらににぎやかさが増してきた。

「おお！我らが英雄様だぞみんな！」

「おや。本当じゃないかい。英雄様、うちに寄ってかんかね！安くするよ！」

「あー！傭兵のおじさんだ！ねぇ、また一緒に遊んでよ！」

「おめぇさんも飲みなせぇ！　今日は無礼講じゃ！　はっはっはっ！」

そしてそんな人通りの多い場所を歩いていれば、戦争で目立ちまくった俺の姿を見つけて騒ぎだす人々もたくさんいる。

一般人の間に俺の顔が知られているのは、傭兵として戦に出る以外にも人助けをちょくちょくしていたからだ。これも名声を上げるのに役立った。市民の生活に浸透した活動と並行して、戦で功を立てる。

こうすることで、親しみやすい英雄様のできあがりだ。その目論見はこの反応を見れば上手くいったといえるだろう。

しかし今はこの騒ぎに交じるわけにはいかない。これから街中が混乱の坩堝に陥る

ことがわかっているからだ。俺の置き土産のせいでな。
だから俺はエヴァの手を引き、喧騒から遠い裏路地に入った。そこから門に向かえばいいだろう。
「これからどうするの？」
「そうだな。十分金は儲けたし。しばらく贅沢できるだろう。なら後は魔法に全集中力を注ぎたいところだ」
「じゃあやっぱり行くの？　魔法世界」
「そうするか。さいわいゲートはヨーロッパにもあるからな」
当初の予定では、『こっち』の世界も一周りするつもりだったのだが。
あるときふと気付いた。
今見て回ってもなにもなくね？、と。
今はまだ１３００年代後期になろうというところ。人類の文明は未だ開化していない不毛な時代。
だいたい産業革命もまだずっと先なのに、今から地球を見て回っても、あまりおもしろくないだろうと気付いてしまったのだ。歴史的建造物の数々もむしろこれから増えていくだろうし、秘境の名所なども発見されていないものがほどんどのはずだ。つまり何も建っていない所の土地を見に行ったり、秘境を踏破しなければならないわけで。

俺は自分が楽しくないと見て周る価値もないという根本的な問題に突き当たってしまったのだ。

もちろん現在でもすでに歴史的価値のあるものなどいくらでもある。ヨーロッパひとつ取ってみても有名なパルテノン神殿やキリスト教会の建物など色々と。

しかし一度周って時代が変わってからまた周ると言うのは、俺としては面倒くさいと言わざるを得ない。時間は無限だがその時の気分というのは大切だ。

二度手間はさけたいという意味でも、ある程度人類文明が熟した時に『こっち』は周りたい。

そして考え直した。

知識も技術も倫理観でさえ未発達な今の世界を見るために時間を費やすより、とりあえず魔法を遠慮なく使える世界に旅立った方が効率的ではないかと。

ゆえに『あっち』の世界でも価値のある「金」を大量に手に入れた今こそ、いざゆかん魔法世界という結論に達したというわけだ。

すでにエヴァにもそれは話してあったので、今はそういう話になっている。

『こっち』はもう数百年ほどあとにくれば色々おもしろくなってるはずだ。周るのはその時にする。一応前世の故郷、日本も気にはなるし。というか、魔法世界はいろんな魔法やそれに関連することが盛りだくさんのはずで、嫌がおうにも期待が膨らむ。一度考

えるそのことで頭が一杯だ。うむ。

「でもその前に――――」

俺は気分良くエヴァと今後の予定を語っていたのだが。不快な気配を感じ、一気に不機嫌になった。

そして若干低くなった声で告げた。

「――――出て来い」

「さすがは紅蓮の英雄様だ。へっへっへっ。」

俺達に殺気を当てて来ていた奴らを呼び出す。

するとゾロゾロと見るからに素行が悪そうな盗賊みたいな恰好をしたゴロツキが物陰から出てきた。２０人ほどいるだろうか。

裏路地に入り、確かに人の目からは離れられたが、それと同時に、良からぬことを考える連中にとって活動しやすい状況になったとも言える。特に俺には心当たりがあるので。

そして俺の考えていた通り、「良からぬことを考える連中」がやはりいたということだ。

「俺達は――――」

「ああ、ああ。言わなくていい。だいたい分かってる。どうせ例の俺の置き土産が原因だろうな。くくっ」

「……」

「沈黙は肯定だぞクズが」

こんな襲撃を受ける理由となった置き土産とは何か。

なに、そんな大したものじゃない。

ほんの少し。

国王と王子がやっていた数々の不正や婦女暴行事件の真相を書類にして提出してやっただけだ。全貴族と官にな。

加えて同じ内容のものを王都の主要施設に張り紙しておいた。うれしいだろう王様。

言い逃れなどできないほど完璧にしてやったからな。

これで一気に国民からの大喝采が受けられるぞ。それがお前にとってどのようなものでもな。

今の戦勝気分でこんな曝露をされて国民はどう反応するかな？

いくら自分達のはたらきを声高に叫んでも、この戦の一番の功労者が俺だということを知っている国民が、特に俺の活躍を間近で感じていた王都や前線の街の住人が、『紅蓮の殲滅者』名義の張り紙を見てなにを思う？

まぁちょっとは「紅蓮の殲滅者にひどい扱いをした」とかいう誇張も入れたが。
すでに悪い噂の絶えなかった王族と、良い噂しかない俺。
立場は逆転している。
「自業自得なんだよ。この国は滅びる。内から。内乱という形でな」
さぁ英雄様からの素敵なプレゼントだ王様。王子も今夜くらいは手に入れた王女を楽しみたかっただろうがそんな時間もないな？
「せいぜい苦しんで死ね」
「ほざけ！　てめぇもここで死ぬんだよ！やっちまえ！」
「おお！」
そうゴロツキ連中の一人が叫ぶと、それを合図に一斉に隠し持っていたナイフやら吹き矢を取り出す有象無象。
愚かだ。
「エヴァ。遠慮する必要はない。どうせ去るのだから。人目もないことだし」
「うん。わかった」
エヴァは返事をした後、スッと右腕を目の前に突き出して手のひらを開く。
氷の女王降臨なり。
「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック――――」

「最後だ。俺達の本当の姿を見せてやろう愚物ども」
そう言って、俺は詠唱途中のエヴァと俺に掛っていた変装魔法を解き、本来の姿をさらす。
「はへっ？」
「おい。なんだよそれ！」
「どうなってんだ！」
「来れ氷精、爆ぜよ風精――――――」
「お前たちに答える必要はない。なぜなら」
「《氷爆》」
詠唱が終わったと同時に。
冷気と爆風が巻き起こる。
冷気は人間の四肢を氷つかせ、自由を奪う。そして一瞬にして脳と心臓に達しその動きを永遠に失わせる。
爆風は人間の体を吹き飛ばす。空間が爆ぜたことで体の一部をもがれる。地面や建物の壁が瓦礫に変わって凶器に変貌する。
「…！…ッ！」
「が……がぎがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「し、死にたくな――――」

王一派に雇われたであろうゴロツキどもは。

何も言えずに氷ついて息絶える者。様々な破片が体中に突き刺さりこれまで味わったことのない苦しみを味わいながら死んでいく者。爆風から逃れても徐々に体温が失われる恐怖を感じながら呼吸が止まる者。

最近特にエヴァも得意魔法ということで力を入れてきた氷系魔法の真骨頂が今、目の前で発揮されている。

「さらばモラヴィア。この国もまた、淘汰されていくがいい」

王よ。傲慢なる人の王よ。

約束通り。

苦しみながら死んでゆけ。

国民の手によってな。

「兄様どうっだった？　ねぇどうだった？　私の魔法」

「ああ。あいかわらず美しいの一言だよエヴァ。よくやった」

「えへへ～。じゃ、じゃあその……今日もご褒美が……その……」

「そうだな。じゃあどこかゲート近くの街で宿を探そうか。それから、な？」

「う、うん！はやくいこうっ」

さて、これでしばらくこの世界ともお別れだな。
そして次なる目的地は魔法世界。
『魔法』世界。……ワクワクが止まらないな！

11話

俺とエヴァはモラヴィア王国を出た後、そのまま通常の方法で魔法世界へのゲートがある土地へ向かった。

最近まで魔法世界である『新世界』とこちらの『旧世界』の間では交流がなかったらしいが、ここ何十年かでそれが少しだけ進み、こちらとあちらを行き来できる門（ゲート）もいくつかできたということだ。

そのひとつがヨーロッパは俺の分かる名で言うとイギリスにあるらしい。ちなみにここが世界で初めてこちらとあちらをつなげたゲートだということだ。

そしてそのゲート。現在魔法使いにしか通れない道を歩いて向かっているのだが。

周りにいる他の魔法使いにものすごく奇異な目で見られる。

だが当然だと思う。

そもそもまだ国交（世界交？）がない時代なのに、子連れで世界を行き来するもの好きがいるだろうか。いやいない。

さすがに話しかけてくるような失礼な奴はいないが、視線をチラチラ送ってくるのはたくさんいる。

だいたいが仕事や調査、探検目的で訪れているような連中ばかりなので、子連れなど一人もいない。

というか未だに魔法世界の一部の人間しかこちらの世界の存在を知らないらしい。

普通の魔法世界人にとって、こちらの世界は伝説かお伽話だと思われているのだ。

これは父が一度だけ魔法世界に行った時に色々な所を周って聞いた話だから確かな情報だ。

ゆえに。

こればかりは我慢するしかない。

俺も自覚がある。隣を歩くエヴァは年齢はどうあれ見た目が子供。他人から見れば兄妹に見えなくもない俺達が珍しい存在であると言うのはよく分かるからな（ちなみに変装する意味がないので本来の姿でいる）。

「ふん、ふん、ふふ～ん♪」

エヴァはそんな訝しむ視線など知ったことかとご機嫌に鼻歌まで歌って、俺の手をしっかり握りながら歩いている。

俺もなんだかそんな陽気なエヴァを見ていると、気にしているのが負けな気がしてきたので考えるのをやめた。

そんなことをしていると、これまで濃い霧が掛っていて悪かった視界が急に開けた。

「どうやらついたようだな」
「うん！　楽しみだね！」
「ああ」
　石造りの古風な門が目の前にそびえ立っている。だいたい１０メートルくらいあるだろうか。
　これが魔法世界への扉。
　俺が恋い焦がれていた新世界へと誘うゲートか。
「いこうエヴァ」
「は～い！」
　興奮が最高潮に達し、心臓がバクバク言っている中。
　俺達は簡単な審査（要は魔法使いかどうかの確認だけだった。まだ検査が甘いな）を受けゲートをくぐった。

次に目を開けた時には異世界。

その姿は圧巻と言わざるを得ない。

空飛ぶ鯨や魚みたな形をした船。杖に乗って荷物を運ぶ人。魔力で動く道具。天まで届こうかという塔に地上や空中からむらがる無数の人影。電力的なものとはちがう独特な魔力的灯の光。見たこともない変わった形の木々や草花。見たこともない食べ物。数は少ないが人とは異なる姿をした人型。水や火を生みだすための魔法を使う人々。

地球とは異なるありとあらゆる文化・文明・歴史を積み重ねてきた世界の姿が、目の前に広がっている。

「……魔法」

そうだ。

これが魔法だ。

「……ま・ほ・う！世界！」

「きゃ～！　きれいな所だね！」

「ああ！ああ！本当に！」
補正かなにか知らないが、俺の目には映るものすべてが輝いて見えていた。
この感動が分かるだろうか！
俺の転生が本当にここにあるものとして。
今まさにその意味を得たのだ。
「それでこれから何する？何する？」
エヴァもワクワクが隠しきれてない。
かくゆう俺もな。
なぜならこの世界には俺の知らない魔法がたくさんあるはずなのだから。
「そうだなまずは……」
だが興奮をとりあえず落ち着かせる。無理矢理。
いますぐにでも世界と同化するべく飛び出していきたい衝動をなんとか、なんとか沈める。
先に方針を固めておかなくてはならないからだ。
その時――――

「おらどうした蛮族！　さっきまでの威勢はどうした！ええ？」
「ははっ。こいつ泣いてますぜ。弱すぎだろ！」
「そういってやるな。俺達が強すぎるんだ」
「……くっ。おのれ人間め」

なんだかこっちにきていきなり不快な状況に遭遇してしまった。
「おら立て！」
「ぐっ！」
俺達はゲートをくぐった先にある広場で会話をしていたのだが、問題が発生しているのがその広場の端っこ。ちょうど俺から見て右側で起こっていた。
俺が不機嫌丸出しで睨みつけるようにそちらに目を向けると、４人の人影がいた。
不快な笑いをその顔に貼りつかせている３人の戦士風の男と。
その男たちの一人に拘束魔法のような光る紐で縛りあげられている褐色の肌の美しい少女。
……魔法をそんな使い方しやがってぇ。
少女は頭の先から二本の角のようなものが生えているので人族ではないだろう。

まだ年代的には十代半ばぐらい。体も平均より小さく、年齢よりさらに若く見える。
エヴァほどではないが、幼いといえる少女だ。
そんな少女は今、苦悶の表情を浮かべ、地面に這いつくばる形になっており、それを3人の男が取り囲んでいるという状況だ。
「へへっ。上玉だな。こりゃあ奴隷商に高く売れるぜ」
「そうだな、だが見た目がいいからって手を出すなよ？　これは商品なんだからな」
「わかってますって！親分。だけどお触りぐらいはいいっすよね？」
「……いいだろう。ただしそれ以上したら許さん」
「ひゃっほーい！」
「……ひっ！」
本当にどこにいってもクズはいるのか。魔法世界に来て浮かれていた気分が一気にガタ落ちした。
この世界でさえ、迫害の問題はついてまわるのか。

『現実』。

この言葉が重くのしかかる。
なんでこんなとこまできて俺はこんな思いを?。
魔法とはそうじゃないだろう。
魔法とは奇跡なのだ。神秘なのだ。
それを解せぬクズが。
存在していいはずがナイ。
コロスゾ。
「兄様!兄様ッ!押さえて〜!」
「……ハッ!　す、すまん」
いかんいかん。興奮が悪い方向にいってしまった。
だが仕方がない。
歓喜の渦に浸っていたのにこの現実。
イライラしてもいいだろう?
気に入らない。ああ気に入らない。気に入らない。
「しかしなんで誰も助けないんだ?」
俺は正直かなり頭にきていたのだが、俺は一旦冷静になってまわりを見渡してみた。

すると驚いたことに、あの不埒な行為に及ぼうという男共を見ているそこらの一般人達は、そちらにチラリと目を向けると、すぐに外してそのままいってしまうのだ。
しかもその表情は同情的なものではなく。かといって不快気なものでもない。
嘲笑なのだ。
そして同時に気付いた。
俺が見ていた人間じゃない人型の者たちの首には。
必ず『首輪』がついていたことに。
まるでこいつは奴隷だとでもいうように。
これはつまり。
「……なるほど。蛮族か」
人種的差別。
ここでも『現実』はのしかかる。
分かっていはいた。あえて考えないようにしていただけで。
だって魔法世界へのあこがれが。
それによって薄汚れてしまいそうで。
魔法世界とて、住んでいるのは人間や亜人。
そこには様々な価値観がある。

その中で自然に生まれる「優劣」の感情。
否定しても否定しきれない心の性。
「……くだらないな。心底くだらない」
なんだろうな。この胸糞悪い感覚は。
人間と違うことがそんなにいけないことなのか。
亜人であることが罪だとでも？

愚かな考えだ。

「ねぇ兄様。どうするの？　本当に殺す？」
「……感情は別にしてもあの少女は気になるのは事実だ」
俺は憤りを必死に押さえながらも、少女の首に釘づけだった。
彼女には、俺達の傍を通り過ぎる人間に奴隷のように付き従う他の亜人とは違い。首輪が付けられてなかった。
これはおかしい。

もし俺が不快に感じている光景が『常識』なのだとしたら。
彼女こそが『非常識』な存在。
保護してその理由を聞いてみたい。

「エヴァはなにもしなくていいぞ」
「は～い」
これはほんの気まぐれ。
せっかくの良い気分をぶち壊しにしてくれた奴らを、ほんのちょっと懲らしめてやりたくなった。
それだけだ。
というか。
おそらくこの出会い次第で、俺の今後の予定が変わるだろう。
俺はこれこそが現実だと突きつけられて。
それを壊したくなっているのだから。
来るまで考えていたことなどすべて後回しだちくしょう。
常識は壊すためにある。
それを魔法という奇跡を生まれながらにして内包している。

魔法世界人に俺が教えてやるのだ。
「おい貴様ら。殺すぞ」
だからちょっとばかり乱暴な言葉遣いになってもいいよな。
決して殺すぞが口癖になってきたとかそんなことはない。断じて。
俺がこの世界を。
俺のために造り替えてやる。
すべてはそれからだ。

12話

「おい貴様ら。殺すぞ」

俺は旧世界を周っている間、いや前世の時からずっと疑問に感じていたことがある。

なぜ人間はくだらないことで争うのをやめられないのか、と。

やれ金がほしい。

やれ女がほしい。

やれ土地がほしい。

やれ権力がほしい。

やれ名誉がほしい。

あれがほしいこれがほしい。

ほしいほしいほしい。

だから戦ってでも奪う。

そんな理屈だろうか。

まぁあんまり真剣に悩んでいたってほどでもないが、吸血王として生まれた後になると、ますます人間達の欲望が醜く見えて仕方がない。

エヴァのこともあるが、そんな利己主義的な考え方をしてしまうことが本性に刻まれている人間を俺はどうしても解せない。もちろんそんなやつらばっかりというわけではないが、あまり好きになれないな。

そして同時に思う。なぜそれが直らないのか。

俺の前世の世界でも大きな戦争は核兵器を互いに突きつけ合うことでなくなったが、争い自体はなくならない。

『争い』こそ人類の歴史。

いくら彼らが否定しようともこれは変えられない事実だ。

それが人間の本能。

ここで最初の疑問に戻る。

なぜやめられないのか。

旧世界の人間達については仕方がないとある程度諦めてもいる。

やつらは科学文明の進化と共に育っていくものだからだ。

俺が旧世界においていくら考えを巡らせたところでどうしようもないしどうしようとも思わない。

魔法関係ないし。単純にやる気が起きない。

でもあえて。

俺はそんなくだらない妄想とは無縁な存在として生まれたため、答えは未だ出ていないが。

現時点での俺の結論を言うとするなら。

『価値観』であると考えている。

あるいは概念そのものといってもいい。

またさらに少し話が大きくなっている気がするが、ようはまだ文明が未発達であるが故の差別や迫害。それから発生する争い。

絶対的な強者が現れないうちはこれが延々と続く。負の連鎖。

なら逆に考えて、２１世紀の地球にあったこの世界の人間達にとっては進歩的な考え方をする俺の方がむしろおかしいのだ。

俺は疑問に対してそういった結論に達し、『旧世界にいる間は』考えるのも止めた。無駄だと思ったからだ。

旧世界においては魔法世界へ旅立ちたいという思いの方を優先したので、だからどうしようとか具体的なことは考えていなかったのもある。

だがこと魔法に関して自重する気のない俺にとっては理想卿にも等しい魔法世界なら話は別となる。

旧世界人ではなく魔法世界人の場合は？

どう考えてもおかしい。
俺からすれば「もったいない」人生を送っているとしか思えない。
魔法という力を持ちながら。
なぜ旧世界人と同じようなことをするのか。
まったくの無駄であるのに。
だから来る前は期待もしていた。
旧世界とは違うのだと。
だから。
ゲートをくぐった先で『それ』を見てしまった時。
そもそもその魔法世界全体に『俺が気持ち悪い』と感じてしまう風潮が蔓延してしまっているという事実を見せられた時。
俺はそれを壊すために行動したくなった。
旧世界ではなんとも思わなったことを変えてやろうと実行しようとする。
そうだ。できるのだ。
旧世界で気付いた俺の早すぎる価値観を持ってすれば。
その価値観を教えてやる方法さえ考えれば。
色々とハイスペックな俺がその方法を実行すれば。

魔法世界を変えられるのではないか?、と。
そんな確信を密かに心に秘め、俺は少女と男たちの目の前にこうして立っている。
すでに行動することは決めていた。どの道俺がこの世界で後顧の憂いなく楽しむためには、胸糞悪い現状を打破しなければ無理だ。というかそっちが気になって集中できないだろうが!
おそらくこちらの人間達が亜人達のことを普通に隣人として扱っていたならば、俺は特に何も思わなかっただろう。
なぜなら俺は、魔法を争いや戦争に使うこと自体に関しては否定しない。
何世紀経とうとも争いはなくならず、そこで魔法というひとつの道具があるのだから魔法による戦争だって起こって当然だろう。戦いではありとあらゆる方法で人を殺すことを目的としているのだから、便利な魔法の利用が発明されるのは自然なことだ。俺だって殺すために、生きるために使う。
だから此処から先は俺の我がまま。自己満足。
それを自覚しているがゆえに、俺は主張しよう。
「つまらん魔法の使い方をするな」
そう。
色々言った。価値観がどうの。世界がどうの。差別、迫害がどうのと。

だが極論。
一切の理屈をはぶいて俺に残る考えは。
究極的自己中心的思考で答えを出す、ということだ。
なぜなら俺は吸血王。
それが許される存在だから。
「俺の気分を害する真似を魔法でするんじゃない。しかも目の前で」
そんなことをされたら俺は。
全力で止めるぞ。殺してでも。
旧世界と変わらぬ魔法世界の『現実』を。
旧世界では「まぁ仕方ない」で済ませたことを。
魔法の楽園で魔法のつまらん使い方をする現状を。
だから俺は助けた後の少女の話し次第で。
今浮かんだひとつのアイディアを実行することを決めた。
まぁ要は単純に。
何かがキレた。
俺は――――――をつくる。

「なぁんだぁ？てめぇ。何の用だよぉ！」
「おいおい。まさかお前も混ざりたいってか？　シッシッ。これは俺らんだ。やらねえよ」
「……そうか」
一言ではどうやら正しく伝わらなかったらしい。
まぁ当然か。こんな馬鹿どもに俺の実力など察しようがないからな。
「悪いがそういうことだ。失せろ」
他の二人から『親分』と呼ばれる、3人の男の中でも一番体格のいい男がそう言って、もう用はないだろうとばかりに視線を俺から外した。
馬鹿が。
親分とかいう男が視線を外したその瞬間。
俺は音もたてず、スッとその背後に立ち。

ズシュ。
「は？」
手刀を心臓に突き刺した。
「な、は、ご、ごぼっ……」
「一人目」
断末魔の叫びもあげられず、怒りや絶望などが混ざった目で俺を見つめたまま、そいつは絶命した。
次の行動に邪魔なので死体は投げ飛ばし（視線の端でエヴァが陰に回収しているのが見えた）、未だに自分たちの親分が死んだことに気付かずに少女にジワジワとにじり寄る男二人に近付いて行った。
まわりで見ていた他の一般人でさえ気付かない。なぜなら俺の魔法《反射》で俺と男たちのまわりを光の屈折を利用して見えなくしているからだ。音は近くに人が寄ってこないのでいいだろう。
「ぐへへ。本当にきれいだねぇ。なんだよこのすべすべの肌は」
「馬鹿言え。それよりもさっさと剥いちまおうぜ」
「おう！」
お前らはロリコンかと。だんだんかわいそうになってきたぞ。むしろこんな少女で

しか性欲を発散できない環境で生きていたのか。娼婦館ぐらいあるだろうに。
……いやエヴァはいいんだよエヴァは。
ともかく。
「まぁそれは叶わないんだがな」
「「はへ？」」
《魔法の射手。火の二矢》
間近で声を掛けられて初めて俺に反応した時にはもう遅い。
魔法の射手が二人の男の腹を正確に貫通し、その威力を思う存分発揮して二人の体は内側から燃えた。
一気に燃え上がったためやはり声も出せずに灰になって風に紛れた。
これでゴミの掃除終了。
「あ、あなたはいったい……」
少女はその一部始終を見ていた。
少女はちょうど男達と対面にいたので、俺が背後から順に3人の男を排除していったがわかったからだ。
「俺か？俺は吸血王だ」
「きゅ、きゅうけつおう？」

「ようは吸血鬼だな」
「きゅうけつき……ですか？」
「お？」
始末ができて少し気分が乗っていた俺はつい正直に何者か答えてしまったのだが、思っていたのとは違う反応を返された。
少女は吸血鬼がなにかわからないという顔をしていたのだ。
「ふむ。とりあえず今は安全なところに行こう。手を」
「あ、ありがとうございます」
少女は素直に俺の手を取った。
「……手を貸しといてなんだが、俺が恐くないのか？」
「え？なぜです？」
「なぜとは。俺は人間だとは思わなかったのか？」
吸血王と名乗っておいて今さらだが、それがわからないなら俺は見た目が完全に人間と同じなので、彼女を奴隷商に売り飛ばすとか言っていたさっきの連中と同類だとは考えないのだろうか。
「でも助けてくれました」
にっこりと花が咲くように微笑む少女。

「私がこの国に来てからもう1ヶ月になりますが、今まで誰ひとりとして。私を助けてくれるような方は現れませんでした。なので私は人間はそういう存在なのだと」
「……つまり君を助けた時点で俺は人間ではないと言いたいのか？」
「ええ。私には『きゅうけつおう』というものがなにか分かりませんが、何者かと尋ねた後に答えたのが名前ではなく種族名のようでしたので。勝手に人間ではないのだと考えましたのもあります。間違ってますか？」
「……いや」
なんとまぁ。賢くそして強い少女だ。
というかさっきまで恐怖に身を震わせていたのにこの堂々とした態度。
どうやら彼女に対する評価を変更しなければならないようだ。
「だがこれだけは言っておく。俺はただ善意で君を助けたわけではない」
「ではなぜ？」
そう言った俺に、警戒の色は見えないがそれでも真剣な表情をした少女。
「実は遠い土地から来たばかりでね。知識が少ない。なので『首輪』のない君に話を聞いて情報を集めようと思ってね。人間に聞いても自分勝手な解釈の元に説明されそうで」
「……情報ですか」
遠い土地とぼかしたのはもちろん旧世界のことをはぶくためだ。面倒だし彼女は知

らなくてもいいことだろう。ゲートをくぐった先は一般人からはただの別の場所へ飛ぶための転移門だと説明されているらしく、それが異世界へのゲートだとは知らされていないと検査を担当していた魔法使いが言っていた。

ゲートの近くにある広場でさえ、隠さないことで一種のカモフラージュにもなっているのだろう。

まさかこんな所に異世界へつながる道があるとは、みたいな。

少女は首輪という単語の所で若干顔をゆがめたが、それでも助けてくれたという事実をちゃんと認識しているのか、彼女は了承を言葉にした。

「分かりました。ただひとつだけ条件をつけさせてください。助けてもらった身の上で申し訳ないのですが……」

「いいだろう。たいていのことなら俺がなんとかしよう。それで？」

「ありがとうございます。実は私、親とはぐれてしまって。こんなところを彷徨っていて下郎に捕まってしまったのもそういう訳があったんです。だから親と合流するまでの護衛を頼みたいんです」

「そんなことならお安い御用だ。交渉成立だな」

むしろそれくらいの交換条件でいいのかと言いたくなる。俺は結構根掘り葉掘り聞くぞ？

「は、はい！ありがとうございます！ええと……」
「俺はライール。ついでにあっちにいる金髪の女の子は俺の連れでエヴァだ」
「よろしくお願いします。私は樹人族の琴音（ことね）と申します」
こうして俺は。
あるいは本気で、という決意を固めるべく少女に魔法世界の話を聞く。

そう。
俺はキレた。
だから俺は俺のために。
魔法世界に価値観を押しつけるために。
なによりも魔法のために。

『国』をつくろう。

１３話

琴音の話はやはり俺の考えていた通りむかむかする話だった。

「私は樹人族の族長の娘です。契約があるのでこのペンダントさえ持っていればある程度は人の街も安全に出歩けるのですが……」

彼女はそう切り出した。

琴音は身分が約束されていて、危ない目に合わないように（亜人は完全に狩りの対象なので）、この街の人間なら全員が知っているこの国の王家の紋章入りのペンダントを身につけていた。これさえあれば一応人と同じ扱いをしてもらえるし、万が一不埒な行いをされれば、した人間側が罪に問われるようになっていた。

だがあの３人はそれを知らずに手を出していたらしい。

それはともかく。

琴音のような存在の方が圧倒的に少なく。

人と対等な交渉さえ難しいのが亜人の現状。

ちなみに樹人族が交渉できたのは、人間の食料事情に直接関わる能力を持っているためらしい。

その能力とは自然を操ることができる、というものだ。

ないものを生みだすことはできないまでも、木々に宿る精霊のような存在から力を貸してもらうことができ、そのため人間側視点で言えば作物の成長促進にとても役立つ。だから交渉で力を貸す代わりに手を出さないという契約が成り立った。

ただ、俺からすれば、契約に応じた人間達は『交渉』の『こ』の字も知らない樹人族をいいように使い潰しているのが目に見えている。しかし琴音もさすがに騙されているとまでは思っていないようだ（だって襲わないなんていう口約束を蛮族と蔑む人間達が守るわけがないだろう）。

ともかく話は長くなったので一通り整理しよう。

俺が琴音から聞きだした話からわかった魔法世界の現状。

人間による勢力拡大にともなって、亜人狩りが激しくなった。特に最近【メガロメセンブリア】という都市国家が樹立してからはそれがさらにひどくなったとも。メガロは純粋な人間による国家で、亜人は蛮族であり人間が管理してこそ世界に秩序が生まれると本気で信じているのだという。

おかげで今では亜人の身分は最低辺。これまでも獣や化生との混血とバカにされていたのに、人間達の間ではすでに奴隷として扱われるのが普通となってしまっているとか。

体の良い労力や性欲発散に使われているだけ。
人間の言い分では、獣と交わったけがらわしい存在。それが亜人。
そんな状態で亜人達はなんとも思ってないのかというとそうでもないのだが、事情がまたあるのだ。
亜人の国は人間の国ほど豊かではなく、そもそもひとつにまとまっていないため、人間と戦っても各個撃破されてしまい敗戦続き。亜人の勢力は減る一方。囚われる亜人の数も年々増加の一途をたどっている。
魔法の研究も人間達の方が進んでいて、それも負ける要因のひとつとなっている。
戦の方法さえ「伝統」を重んじる亜人達は過去から学ぶという風習がないがゆえに知らず、突撃や魔法の乱発ぐらいしかしない。
こんな状況では総合的に見て亜人達はどこかで一致団結しないとじり貧なのだがそれも難しい。
なぜなら種族ごとに忌み嫌っていたり、外界と交流を持ちたがらない種族ばかりだから。
あるいは危機感を持っていたとしてもなかなかそのきっかけがない、きっかけの作り方さえ分からない。
そもそも琴音の話しぶりを聞いていると、『国』という概念すら思いつかないレベルの

知識量のようだ。博識らしい琴音でさえ知っていても思いつかないようだから、亜人全体のことはある程度察することができよう。

種族単位でしか動けない者がほとんど。せいぜい弱小種が大きい種族の傘下に入っているぐらい。

今はまだ数は多い亜人と人間の勢力は拮抗しているが、あと数年すればそれも崩れる危ない戦況。

魔法世界の現実はこんなところだろうか。

なんだこれは。

こんなものが魔法世界なのか。

これで魔法を楽しむことができているのか。

――――――冗談じゃない。

「私はずっと考えてきました。すでに私の中では人間とは脅威そのものであるという認識があります。だからうれしそうに人間達との交渉がやっと上手くいったと話す父を見て、敬愛しているはずなのに、その交渉の大切さが理解できるのに、どこかで侮蔑してしまう自分がいて……なぜ？　私はどうしたいのでしょう……どうしたら……すでに何人も同胞が殺されているというのに……！　私は人間どもが許せないっ！」

憤りを胸に燃え上がらせて語る琴音をふと見ると。

彼女はいつからか、ポロポロと涙を流しながら話していた。

俺が質問し、それに答えて話しているうちはよかった。

ただの事実確認だ。すでに自分も知っていることをしゃべっているにすぎない。

しかしそれは同時に琴音にとっては自分の中に宿る疑問や葛藤を呼び起こしてしまうものだったらしい。

それはとてつもなく大きい悩み。苦しみ。

あの気丈で賢そうな少女は、やはり「少女」だったのだ。

族長の娘であるという。ならば他の同族より、より近くで人間と接してきた、見てきたはずだ。

そこから彼女が得た結論は、きっと愛する家族とは異なる。

明言は出来ずとも彼女は言っている。

「媚びている父を見るのはつらい」と。

彼女は気付いていないだろうが。

「ライールさん。私はおかしいのでしょうか……私はただ、故郷の皆と平和に暮らせればそれでいいのに……」

「もういいわかった。わかったよ琴音」

俺達は話すためにと寄った広場の近くのオープンカフェみたいなところに向かい合って座っていた。俺の隣にはもちろんエヴァがいる。

彼女は基本俺の意志に従うので、終始無言で視線をテーブルの上に固定し静かにしている。だがそれがこの状況ではありがたい。冷静な者がいることがこんなに安心できるとは。

エヴァが静かな空気を隣で発していなければ、俺は激情のあまり、ペンダントがあるが亜人である琴音のことを舐めまわすように見てくる周りの人間を手当たり次第に殺してしまっただろう。

だがそれは出来ない。
だから。
「俺がなんとかしてやる」
「えっ？　ラ、ライール……さん……？」
俺はもう見ていられなかった。
座っていた席を立ち、静かに泣きじゃくる琴音を後ろから抱きしめる。
どうか心が安らぐようにと。
かつてエヴァにしたように。
「え、あ、あの？　な、なんとかって……どうやって？　と言いますかその……恥ずかしいです……」
おそらく彼女は相当悩んだのだろう。悩んで悩んで。答えは見つけられなかったにちがいない。
だがそれは俺が示してやれる。
俺にだって所詮個人。限界はあるだろう。
だが。
数は力だ。
それを俺は知っている。

「国を作るのさ。俺達と亜人達とで。そこには友好的な人間もいていいだろうが」
「え？」
こんな世界に誰がした？
物事を広く考えられない愚か者どもだ。
そいつらが今。この世界にある国々の上層部に巣くっている。
それこそが元凶。
自分たちが正しく、自分たちが支配「する」側。だから当然。自らの行いこそが正義。
そんなやつらにこの世界をまかせていたら。
魔法が穢れる。汚される。
そんなことはさせない。
その思いあがりを叩き潰す。
俺が見せてやろう。
魔法とは無限の可能性を持った奇跡なのだと。
魔法世界に住む亜人と人間に。
魔力を生まれた時から体に持っているこの世界の住人がいかに素晴らしい存在なのか。
前世ではいつしか諦めていたロマンをこの手につかんだ俺が。

そのすばらしさを分からせてやる。
「エヴァ。少し付き合ってほしい。世界を。魔法を見て回るのはその後だ」
「うん！　兄様がやりたいことは私のやりたいことだよ。一緒にがんばろう？」
「ああ。それに遠回りかもしれないと思ったことが近道だったりするしな」
さすがはエヴァ。
俺の思いをくみ取ってくれる優しき少女。
「まずは樹人族と話をつける。琴音。協力してくれ。そうすれば――――――」
居場所を奪われ続ける亜人達。
戦争はもはや回避できない現実的な未来に迫っている。
だが。
ないならつくる。
彼らの、そしてなによりも俺達の住みやすいひとつの『世界』を。国を。
吸血王たる俺ならできるはずだ。
転生する時に王族とか面倒な地位にはしてくれるなと願ったが、この場合は別だ。
俺が『王』となるのだから、俺の思い通りにことを動かせる。王族に生まれて上の命令に従わなくてはならないとか、俺にとって面倒なことは存在しない。なぜなら俺がトップだから。

前世の記憶やらも総動員して新たなルールを持った国を作る。作ってみせる。
それもまた。
俺の信じる魔法のために。
「――――そうすれば、お前の願う未来を見せてやる」
俺はうち立てる。
吸血王と魔法を愛せる人々による。
真なる魔法の楽園を。

「いいか琴音。よく聞け。このままではジリ貧だ。やがて亜人は人間達の奴隷民族と化す」
「!?……それは」

「わかっている、か？　しかしどうすればいいのかわからない？」
「……はい。正直私は故郷の樹人族の里からあまり外に出たことがありません。なのでひどい扱いを受ける私達とひどい扱いをする人間のことを理解しようとしても、せいぜい里に蓄えてある文献を読んだり、里に訊ねてくる商人の方の話を聞いたりするくらいです。そもそも人間達のこともあまり知らないし、どのような目で私たちを見ているのかもわかりませんでした」
　……やはり琴音は賢い。おそらく亜人の中でも特に優秀な娘だ。
　まず相手を知ろうということに思いつく時点で別格だ。
　そして実際に情報を収集しようという姿勢を取っていることも好感が持てる。
「琴音。君はすで核心に至っている。『人間とは何か』。すべてはそこに起因する」
「え？」
「君も悩んだと言っていたな。恨んでいるとも。それは正しい感情だ。いきあたりばったりで人間と相対しても勝てはしない。人間の一番の強みとは何かわかるか？」
「……群れること、でしょうか？」
「正解だ」
　さすが。少しカマを掛けてみたがある程度考えていたのだろう。そして今も考えている。

そうだ、思考しろ。

考えることをやめたら、その時点でこの戦争は敗北だ。

「だがもうひとつある。それが『学習』だ。彼らは過去から学び、未来を学ぼうとし、そして現在に学ぶ。人間は決して歩みを止めはしない。伝統を重んじて立ち止まってしまう亜人と違ってな」

「学ぶ……」

ここからは亜人であり外界を知らない少女にとって未知の考え方。

人間の強み。その一端に触れる話だ。

戸惑いながらも噛みしめるように琴音は神妙につぶやく。

「人間達は単体では弱い生き物だ。個人の身体能力的にはほとんどの亜人の足元にも及ばないだろう。だから彼らはまず群れる。集団を作る。国家を形成する。そして彼らは日々学ぶ。考える。戦で負けたならその理由を。勝ちたければ陣形を。食料が足りなければ効率的に作る方法を。生活をより便利にしたいなら発明を。そのための理論を。より豊かに生きるために。そうして積み重なって出来ていく先人達の教えを書物や口伝でちゃんと残し、それをさらに未来に向けて現在で研鑽し、次世代の人間がまた新しいものにしていく。更新していく。これが人間の繰り返してきた『歴史』」

人間は愚かで欲張りだが、それゆえに繁栄する。

なにかを「求める」というのはそれだけ強いものなのだ。
俺もその意味では魔法を『求め』た。
だから今はどうあれやはり俺もまた、人間的なのだろう。
「……」
琴音は俺の言葉をひとつひとつ噛みしめるように飲みこんでいる。
必死に理解しようとしているのか眉間を悩ましげにゆがめながら。
この魔法世界はまだ未熟だ。それはつまりもともとの住人である亜人もまた未熟ということ。
人間に反感を持っていても、それのぶつけ方が分からない。
人間の真似をしようと思っても、そもそもどうやったらいいかわからない。
まずは彼らも『学ぶ』ことから始めなければならないのだ。
「なんとなく……なんとなくですが、ライールさんの言いたいことがわかりました。つまり私たちにいま必要なのは人間達と同じ場所に立つこと、ですね？」
「……その通りだとも。琴音。やはり君はすごく聡いようだな」
「い、いえ。ライールさんのおかげで考えることができただけです……」
俺の本心からの褒め言葉に素直に照れる琴音。
思わず真剣な話をしているのに頬笑みがこぼれてしまう。

「っ!!　そ、それより！　話が戻りますが、先ほどライールさんがいった『国をつくる』というのはつまりそういうことなのですよね？」

「ああ。俺も多少腕に自信はあるが、一国を相手にできるなどと傲慢なことは考えていない。数は力だ。それを亜人達もまずは持たなくてはならないと思う」

俺は確かに吸血王としてかなりの力を持っている。

数百、数千、数万の大軍を相手にしても、なお勝てる自信はある。

だが俺一人突っ込んで例えばメガロメセンブリアを滅ぼしたとしよう。

それで何が解決する？

根底にある亜人差別は変わらず、ともすれば人間達のさらなる反感を生むだけだ。

人間達をすべて滅ぼすなどという危険思想に俺が染まっていたなら話は別かもしれないがそうじゃない。

今は未熟なこの世界の人間もまた、同時に魔法を享受する尊い命だ。

それがすべて敵などとは俺も思っていない。

俺がしたいのは新しい考え方、世界のあり方を見せつけてやることだ。

そうして僅かでもいい。

亜人と人間の間になんらかのパイプができれば、少しだけこの世界も（多分に俺にとってという意味を含めた）住みやすい世界になるだろう。

「……」
琴音は一旦口を閉じると、目をつむり思考の海に沈む。
俺が示すことができるのは一つの答えのみ。
それをどう受け止め、どうするのかは彼女しだい。
俺としてはできれば彼女と共に歩んでみたいものだが。
「むぅ～」
「ん？」
期待を込めた目線で琴音を見ていると、横から不満たらたらなうめき声が聞こえてきた。
誰かなど見るまでもなくわかる。
「どうしたエヴァ？」
「……兄様は琴音のこと好きなの？」
「な、なぜ？」
「あ～！　ちょっと返事が遅かった！　やっぱりそうなのっ!?　まだ会ったばっかりなのにぃ～!!」
「……」
しまった。

これが女の勘と言うやつだろうか。
別に女として意識しているとかではないが、確かに俺はこの出会って数時間の少女に好意を抱いている。
はっきり言えばこれほどよく出来た娘はなかなかいない。
なんというか、器量がいいのだ。年齢も自己紹介の時に聞いたらまだ１６歳だというのに。
それに見たところ、魔力もそれなりのものを持っている。これに加えて種族的な能力も持っていると言うのだから相当なものだ。
良い女、なのは間違いない。
そういった感情があったため多少エヴァの問に詰まった。
別に後ろめたくはないのに、なぜか妻に浮気の追及をされる夫みたいな状況になってしまったな。
「落ち着けエヴァ。そしてあまり大きな声を出すな。琴音に聞こえ――――」
「兄様は優しすぎ！　結局自分のためとか言ってるけど琴音ちゃんとか亜人の人達のためにやるんでしょ？素直じゃないんだから！　でも……そんな優しい兄様だから私は好きになった。だから…だから他の女の子と仲良くするのも仕方ないけどっ！　だってそれが兄様だから！　でもでも、一番は私だからね！」

「おいエヴァ。俺へのフォローと願望がごちゃまぜになっているぞ」
「と・に・か・く！　私が『ほんさい』だから、ね!?」
それは『本妻』のことを言っているか。どこで覚えたそんな言葉。
「あ、あの～。ライール、さん？」
「お、おう。すまない琴音。連れが暴走してしまって」
あれだけ騒いでいたら懸念通り琴音にも聞こえていたらしい。
思考の邪魔をしてしまっただろうか？
でもエヴァは悪くないし。どうしたものか。
「い、いえその。もう十分考えることができましたのでいいのですが……ライールさん」
「ん？なんだ？」
よかった。答えは出せたようだ。やはり彼女は利口な――――
「ま、まずはお友達からはじめませんか？」
「……そうだな」
……女とは複雑な生き物なのだな。

最後はエヴァのおかげで明るい空気に（俺にとってはとんだ展開だったが）なったが、琴音はその後で真剣
な表情でしっかりと俺の目を見てこう答えた。

「協力します」、と。

１４話

なんだか最近ふと思った。

俺の思考がだんだん黒い方向へ向かっていやしないか、と。

そう思ったきっかけは琴音がはぐれてしまったという父親に国の管理する宿の一室で会った時だ。

彼は琴音が嘆かざる負えないほど、確かに少しばかり知恵の足りない大人だった。

俺に協力すると決め、そのために力を貸すと約束したことを父親に告げる娘に、「そんなことを言うもんじゃない！」と頭ごなしにどなりつけたのだ。

もちろん俺に対しても罵倒を浴びせてきたが、そのことについてはなんとも思っていない。当然の反応だ。

なにせ少し目を離したすきに変な男に娘が掠め取られたようなものだろうからな。父親目線では。

問題は実の娘である琴音の必死の説得にそれ以後もまったく耳を貸さず、「父のいうことが聞けないのか」「人間に逆らうな」「育て方を間違えた」などとしか言わず、あま

つさえ最後には「お前は偽物だ」言い始める始末。

さすがの琴音もそこまで言われた段階で涙目になった。彼女は言っていた。「敬愛している父」を見ているのが辛いと。彼女は彼女なりに父を愛していたがゆえに、まさかここまで人間と事を構えることに過剰な反応を父親がするとは思っていなかったのだろう。

俺も話に聞く限り娘には甘いのではないかという印象を持っていたので完全に予想外だ。

「もういいわかった！　どうやらお前を自由にし過ぎたようだ。　金輪際、里からは出さん！」

「ち、父上……？」

「なぜわからんのだ。人の下に付くことが最善の道であると！　そう教えたつもりなのだがな！」

……正直琴音は本当にこの父親の血を引いているのかと疑問を抱かざるを得なかった。

はっきり本音が出たのだ。『下』と。

ということは父親はわかっていて契約を結んだということだ。

それを里の同族達や娘に黙ったままに。

この様子ではなにか後ろめたい特別なやり取りもした可能性があるな。
「ち、ちちうえ……私は……」
「うるさい！　もう話しかけるな！　私の言うことに従え！」
俺もたいがい自分勝手だが、里の総意を族長だからと言って勝手にきめてしまうのはいただけない。俺だって一応相談くらいするぞ。うん。たぶんな。
いっこうに話は進まないし琴音はどんどん顔が蒼白になっていくしでそろそろ俺はイライラがたまって来た。そしてこの時だ。すぐにあらぬ方向に思考が飛んだのが。
黙らせてやろうか……。
琴音の前で殺すわけにはいかないが、痛めつけていうことを聞かせるぐらいやってやろうかという考えがなぜかすぐに出てきた。
そして同時に気付いた。
こんな思考にすぐいきつくのはまずいのでは？
……俺は前世の人間としてよりも既に吸血王しての目線で物事を考えることに染まっている。
それが良いか悪いかで言えば、おそらく悪い……のだろう。
いかんな。一回それこそ冷静にならなくては。あまり極端な思考をしていると次第に視野が狭まり、暴君のような存在になっていってしまいかねない。既に手遅れとかい

う考えは断固として受け入れない。認めないぞこの野郎。
まぁ今気付けたということで良しとしよう。そしてそれに気付くきっかけを作ってくれた琴音の父親には一応感謝して、なるべく穏便に眠ってもらうことにしよう。琴音が父にかわり族長の後を継ぐくらいできるはずだ。母親は既に数年前に病気で亡くなっているという話なので、現族長が『納得』してくれれば引き継ぎはスムーズにいくはず。
そう考えをまとめ喚き続ける父親と俯いてそれを聞いている琴音に話しかけようとした。
その時。
ヒュッ。
「ん？」
俺の高性能な耳はなにか小さな物体が風を切る音を感知した。
それはとても早く飛来したようで、それがどこに着弾したのかまではさすがにすぐには分からない。
だがそれはすぐに判明した。
「いいかげんにしろと！……あぁ？」
バタンッ。

それまで元気に琴音を怒鳴り散らしていた父親が急に呆けた表情になり、急に膝から崩れ落ちた。
「ち、父上？　ど、どうなされたのですか？　父上？」
実の父親から辛辣な言葉を投げかけられて意気消沈していた琴音も、急変した父の様子に心配そうに声を掛けている。
しかし俺は前のめりに倒れた父親の背に視線を向けていた。
「兄様。あれ」
「ああ。吹き矢だな。おそらく毒」
今の今まで黙って俺の背に隠れていたエヴァも気付いたようだ。
視線を上げれば父親のすぐ後ろには窓があり、そこは開かれていた。
外からは丸見え。狙おうと思えばどこからでも狙える。そんな位置に父親は立っていた。
「父上！　父上?!　しっかりしてください！」
再び矢が飛んで来るかと警戒していた俺のすぐ目の前では、倒れた父にすがりつく琴音がいた。
さっきとは違う意味で涙を目に溜めている。
そんな父親はいっこうに動く気配がなく。倒れる直前の呆けた表情のまま血の気を

失って。
息を引き取っていた。
「……毒矢による暗殺？しかしなぜ？」
それ以降琴音や俺を狙って第二矢が放たれることもなく、警戒が無駄に終わったかと思った直後。
ドタドタと複数の人の足音が、宿の2階にある俺達のいる部屋に向かって来るのが分かった。
バンッ！
そして勢いよく部屋のドアが開いたと思ったら、中年の小太りな男を真ん中に4人の屈強そうな騎士風の男たちがズカズカと押し入ってきた。
真ん中の中年男はそこそこ豪勢な服装を着ているので、おそらくこの中で一番地位の高い人間なのだろう。
守るような陣形をとっているし。
「……ふん。上手く仕留めたか。しかし手間が増えたな。まさか部外者がいたとは」
ちょうど位置的にはドアが部屋の中心にあり、男から見ると右に琴音達。左に俺達という具合。
入ってきた瞬間にチラリと右に目を向けた男はどうやら琴音の父親の死を確認して

御満悦の様子。
「ん？……よく見たら娘ではないか。なるほどなるほど。後で探しに行かせようと思っていたがこちらの手間は省けたな。ならば良し」
今の発言で父親を殺したのはこいつだということが分かる。つまりこいつはメガロ側の人間？
「この男も哀れな男よ。妻を殺され、次に自分も死に。そして娘も同じ末路を辿るのだから」
「……なに？」
おそらくつい口にしてしまったのだろう。上機嫌な男が俺の訝しげな視線に苦い顔をした。
「なんだ貴様は。こいつが雇った傭兵か？　ククッ。もろとも始末すれば問題ないな」
……なんとも嫌な笑い方をする。
この豚野郎め。
「ど、どういうことですかファウス議員！　は、母を殺したって！」
父親の亡骸にすがりついていた琴音も、どうやらこの豚の一言を聞き逃さなかったらしい。
俺から琴音へと視線を移した豚、ファウス議員とやらは、ニヤリと先ほどよりもさら

に嫌悪感を誘う笑い方をした。
「ふんっ。まぁどちらにしろそこの雌は始末するのだから特別に教えてやっても良いぞ？」
……ああん？
「よく聞け雌。この愚かな男は最初、我等の要求を突っぱねたのだ。対等な立場で交渉をしているはずだ、とか言ってな。だから分からせてやったよ。共に交渉の場に来ていた妻を目の前で殺し「娘まで失いたくはあるまい？」と言ってな。後は楽な仕事だったよ。亜人を飼育していればいいのだからな。だがそれももう不要だ。貴様らの力を解析し、すでにその能力の複製魔法を開発できたのだから。くはははは！」
「……ほぉ」
「そ、そんな……なんてこと……！」
こいつの話から俺はだいたいの裏事情を把握できた。
そして父親があれほど娘の意向に反対した理由も氷解し、琴音の父に対する認識を改めた。
やはり彼は琴音の立派な父親だったのだ。
つまり。
数年前に琴音の母親が病死したなんてのは真っ赤な嘘で。

父親は琴音と同族の命を守るために、心を鬼にして人間に従っていた、と。
そしてこいつらは今日この日。
その薄っぺらい約定さえ娘の目の前で破ったのだ。奪うだけ奪って。
「そして！　ああなんと哀れな羊だ。結局は娘もその命を落とす！　またひとつ、亜人共の『群れ』を浄化することができる。これで私も元老院入りだ！」
「……そういうことか」
こいつらはそもそも亜人達を動物かなにかぐらいにしか考えていない。
でなければ『群れ』等と……。
「議員。そろそろお時間が」
「うむ？　そうか。では娘の方は生きたまま捕えろ。あの容姿なら高く売れる。傭兵の方は……」
騎士の一人に声を掛けられ高笑いをやめた豚は、琴音を一瞥し、その後に俺とエヴァに視線を再び向けてきた。
「……ほぉ。これはこれは」
そしてエヴァを見ると、舐めまわすように目を動かし始めた。
「予定変更だ。男は殺せ。あの少女は私の所に連れて来い。可愛がってやろうではないか」

「承知しました」
　……なんだと？
　こいつは今ナンテイッタ？
「愉快愉快。今日はなんとめでたい日だ。面倒な親娘を始末できた上に私好みの女まで手に入るとは。笑いが止まら――――――」
「死ね」
　グシャ。
「はへっ？」
「なっ！ぎ、議員!?　貴様何を！」
　俺は最後まで豚やろうの言葉を聞いてられず、心臓に手を突き刺して握りつぶした。
「あ、あがっ……ごふっ…」
「苦しんで死ぬがいい。この家畜風情が」
　たっぷりと憎悪をこめて殺してやった。俺のエヴァを目で穢しやがった奴に容赦はしない。
「議員をお助けしろ！」
「「おお！」」
　一瞬の出来事で、しばらく棒立ちになっていた４人の護衛騎士の男たちは、一斉に俺

に飛び掛って来た。
「騒ぐなゴミども。すぐに豚と同じ所に送ってやる」
俺はそんな騒音を発する生ごみを処理すべく、豚から手を引き抜き、魔力を解放したのだった。

「……うう……グスッ……ちちうええ……うわあああああ！」
「琴音…」
「琴音さん…」
俺が侵入者たちに鉄槌を下し終えると、部屋の中には琴音の慟哭だけが響き渡る。
無理もない。誤解をして勝手に心のどこかで軽蔑もしていた父が、彼女の信じた父となんら変わっていなかったとやっと気付けたのに、すでに謝ることさえできないのだから。

「ラ、ライ゛ールざん……」
「なんだ？」
しばらく父の体に顔を埋めて泣いていた琴音だが、涙でぐしゃぐしゃにした顔を上げて、意志を強く宿した瞳を俺に向けてきた。
「私たちを……助けてくれますか？　国を……同胞が安心して暮らせる国を……作ってくれますか……！」
「ああ。約束しよう」
「一緒にがんばろう！琴音さん！」
「……はい！」
この日、吸血王とある一人の少女は。
終生まで破られることのなかったひとつの盟約を結んだのだった――――

琴音の父の暗殺という事件があった日から数日後。

「行け！　同胞を救うのだッ！」

「「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」」」」

人間の亜人狩りと呼ばれる『狩り』が行われている、亜人と人間の争いの最前線。

未だ人間の基盤が緩い未開の地。

その近くにある鬱蒼と生い茂る木々の奥の奥。

そこには亜人の持つ技術では到底作りだせない鎧や武器で身を固めた無数の人影があった。

その数は数千にも上る。

その人種は様々だ。

角を生やしている者。体毛に覆われた体躯をしている者。身体の一部分が以上に長い者。そもそも人型とは程遠い姿の者。

そしてその先頭で騎馬に堂々と跨り指揮をとっているのは――――

「第一班は正面突破！　第二班は側面へ！　第三班は救助を最優先に！　皆奮起せよ！

我らが興廃この一戦にありいいいいッ！」

「「「わああああああああああああああああああああ!!!」」」

――――――紅い戦鬼と化した。

吸血王ライールである。

１５話

「……ん？　これは……」

人里離れた陸の孤島とも言うべき深い深い森の一画。日差しも入り込まない暗闇の中に、地下深くまで続く洞窟があった。

その深奥には、たったひとつだけ魔法のランプが灯っており、すでに寿命間近のボロボロ机とイスのみが置かれていた。

「珍しい来訪者が来たものだ」

そしてそのイスに、黒いローブに身を包み、顔も体も覆い隠した人型の『何か』が座っている。

発せられる声は、高くもなく低くもない。とても中性的でそれだけでは男か女かさえ分からない。

「……さて……どうしたものか……」

そんな怪しさ満点の『何か』は、その場から動くことなく独り言をつぶやく。

その意味するところは、本人にしか分からない。

その人型の『何か』から、この世界において他と隔絶した魔力が放出される。

すると目の前には鏡のようなものが現れ、どこか別の場所の映像を映し出した。

「……ようこそ同胞よ。我が創りし魔法世界へ」

その鏡の映像の中には、一人の男が騎馬に跨っている姿があった。翼を持ったその天馬は、男の合図とともに空に飛翔し、男とその後ろに同乗する金髪の少女二人分の重さをものともせずに、戦場へと飛び込んでいった。

「願わくば。いつか来る狂乱の渦に飲み込まれぬことを」

最後にそうつぶやくと『何か』は光る鏡を消し、再び暗闇の中に溶けていくのであった――――

俺が最初にしたことは、仲間を集うこと。

琴音の所属する樹人族については、琴音の説得と族長の殺害という事実によって皮肉にもスムーズにいった。

災いが福に転じるというのは、こういうことを言うのだろうか。あまりに重い災いだったが……。

そこから樹人族のつてすべてを使い、様々な種族に声を掛けた。

もちろん先に得た情報通り、亜人の交流範囲は限られているため、それだけでは数は揃わない。つてを手繰ったその先から、さらにつながりを求めて呼びかけた。

そうすると、以外にも『集団で戦う』という考えに賛同者が多く出てきた。

特に、心のどこかでこのままでは駄目だと気付き始めていた各種族の若い連中が、俺の呼びかけに答えたのだった。

しかし、順調だったのはそこまで。

これは人数が増えることの弊害とも言うべきか、ライールという男が指揮を取ることに不満を漏らす者達もやはりいる。

それは種族的なことではない。俺が見た目が人間でもまったく違う存在であるということは亜人ならなんとなくわかるらしく、そこは問題にならなかった。

文句や不満が出た理由は、簡単に言うと俺が上に立つほどの実力者かどうか分からないから、というもの。

亜人は実力主義的な所があるためなのか、単純な力比べで一番強い奴が組織のトップであるべきだという考えがある。脳筋、野蛮と言われればそれまでだが、俺にとっては

むしろ好都合。

俺が『文句のある奴は掛って来い』と挑発し、そのすべてを叩き潰したことによって、よく分からないが熱狂的な支持を得るに至ったのだから良しとしよう。うむ。

「さて、ここからが問題だな」

「そうなのですか？　皆さんやる気に満ちているのですし、このまま戦地に赴くものと思っていましたが……」

「まぁそれは間違いないがな」

戦力と士気をある程度高めることができた俺達は、現在今後の方針確認をするべく、樹人族の集落の中にある長の（琴音の）家で、頭を突き合わせていた。

なぜここなのかというと、別に琴音の集落だからというわけではなく、仲間となった種族の中で、戦略的に一番人間が入り込みにくい、見つかりにくい場所にあったのがここだったから。

メンバーは俺、琴音、エヴァは当然のこと、加えて俺が独断と偏見によって任命した各種族の部隊長数名。

俺の発言に対し、琴音が自分の思ったことを言う。エヴァ以外の参加者も「うんうん」と首を縦に振っている。

基本的に好戦的な連中ばかりのようで、心強い面もあるが若干その脳筋具合が心配に

なる俺。
「行き当たりばったりで沸き潰ししていっても非効率的だと思わないか？」
「それは……そうですね」
「短期的な勝利を求めてるわけじゃない。俺達は今後の亜人達の身分を高めるべく戦う。ただ集団になって抗えばどうにかなるわけじゃない。そこは理解してほしい」
確認するように俺が集う皆を見渡すと、頼もしい力強い瞳でこちらを見返してくる。
彼らは集落から俺のもとに来る時、かなり仲間とひどい別れ方をしてきたらしい。
「後悔するぞ」「ここにいれば安全なのに」「戦わずに逃げれば」「野蛮人の味方をするか」。
特に年嵩のいった者達にかなり強引な止め方をされていたようだ。一族を守るという信念のもと、彼らは彼らなりに考えての発言なのだろうが、前線に出て、戦士として人間と相対する機会の多かった若年層の者たちにとって、それは世迷言に映った。
〝戦わななければ何もかも奪われる〟
ある一人の亜人の青年が俺に向けて言った言葉だ。
自分がリーダーとなって人間をたびたび追い返していたが、来るたびに増え続ける人間の軍隊を前にするたび、恐怖に駆られたという。
いつか押し負ける。
いつか自分も死ぬ。

いつか種族も滅ぼされる。
――――人間が恐ろしい。
ここにはそうした一種の強迫観念にも似た感情を実際に人間と相対することで感じた者達ばかりが集っている。
だがだからこそ、彼らの瞳には強い光が宿る。
人間に恐れを抱いてなお、俺の目の前の者達、その下に配属された各種族の戦士たちは、打開策を己の中で模索し続けていた。諦めるということをしなかった。
〝その答えをあなたが教えてくれた〟
同じ青年が笑顔で俺に言ってくれた。
自分達だけでダメなら結束を。
場当たり的な戦いではなく戦術を。
亜人全体を相互に守る戦略を。
現実を思い知っている者ほど、俺が外から持ち込んだ新しい考え方に共感してくれた。
どうせ戦って命を散らす運命ならば。
未来につながる戦場で。
そんな多くの尊い想いを俺は背負って今がある。

「つまりライールさんは戦うにしても『目的』を持った方がいいとおっしゃっているんですね？」
「ギルの言う通りだ」
どうやら何が言いたいか、なんとなく察してくれたようだ。
視線を向けるとあの時の青年、牛角族のギルだった。
出会ったころの暗い表情と諦観の混じった瞳ではなく、希望を持ったいい瞳だ。
「これを見てほしい」
意思統一ができたところで、俺はこの樹人族の集落に入る前にある程度把握しておいた、現在の戦場分布図を取り出した。
地図の内訳は、どこに森があって湖があってというかなり大雑把なものだが、場所さえ分かればいいのだからこれでいい。
皆の視線が地図に映ったところで、俺は指で示しながら説明を始めた。
「まず前提として拠点と言うものはどうしても必要だ。その候補地としてはこの辺りがいいんが……」
「えっ」
「げっ」
現在の『亜人狩り』の侵攻具合から見て、都合のいい場所に目星をつけておいたのだ

が……？

「どうした？」

「ライールさんそこは……」

その候補地を示した瞬間、なぜか幾人かが苦い表情をした。

理由を訊ねると、ギルが周囲の視線に押されて渋々答えた。

「……その土地に、とても厄介な種族が住んでいるんです」

「厄介？」

不思議な言い方をする。

強い、大きいなどの特徴をとらえる言葉は数多くあるが、種族全体を総じて『厄介』とは。

「心を読むんです。その方達」

「琴音？」

どう説明したものかと困惑気味のギルを見かねて、琴音が受け継いでそう言った。

「私達亜人の中でも忌避される能力です。なにせ体に触れられただけですべてを読まれてしまうわけですから。力の強いものでは近寄っただけである程度読めるとか。彼らが悪い訳ではないのですが、その読心能力故に人間からは便利な道具扱い。私たちにとっても扱いに困る種族。そう言う意味でおそらくギルさんは厄介だと言ったのだと

思います。少し前に彼ら絡みで関係のない種族が滅ぼされたと噂で聞いたこともあるくらいですから……」

「なるほど。読心術ね……」

ギルや琴音たちを非難することはできない。

そんな能力を生まれた時から持っている存在がひとつの種族を形成しているのだ。生き物である以上警戒心が出てしまうのは仕方がない。

しかし権力者が欲しがりそうな能力だな。

もし本当にそんな種族がいるなら、確かにそれが原因でひとつやふたつ集落が滅んでもおかしくない。

……ふむ。

「行ってみるか」

「ラ、ライールさん？」

「ほ、本気ですか？」

どうやら亜人達には苦手意識みたいなものがあるみたいだが、正直得難い能力だ。

今後の戦いに置いても重要な位置を占めるはず。

そうでなくても、放っておくのは俺達の行動指針と逆行する行い。

どのような種族であろうとも。どんな能力を持っていようとも。すべての人種を受

け入れる国を創って行くのなら、避けては通れない。
それに俺は心を読まれたところで動じない自信がある。
彼らに隠しごとなどする必要はないのだ。
後ろめたいことがないなら、普通に会って話をすればいいだけのこと。
「どちらにしろ本拠を構える候補地の一つだ。交渉くらいしにいくべきだろう」
「そ、それはそうですが……」
「心配するな。俺とエヴァだけで行く」
「い、いえっ！　だったら私もお話に真実味を持たせる意味でも同行を――」
「無理をするな。それに彼らは心を読むんだろう？　なら『真実』などすぐに分かる」
「……すいません」
琴音は責任感からか同行を申し出たが、どうしても心を読まれるという恐怖が先行していらぬ想像力を働かせてしまっている様子。
それを自分でも分かっているために、無理をせずにこの場に残るようにと言った俺の言葉に素直に従うことにしたらしい。
それでも俺や交渉しに行く種族の者達に罪悪感を感じているようだ。謝りながらシュンと落ち込んでしまった。
「君には別の仕事を頼もう」

励ます意味で軽くポンポンと項垂れる頭を撫で、残る彼女にここを離れる俺に変わってやってもらいたいことを告げる。
「……なんでしょう？」
「鍛冶鉄工の得意な者達に武器の製造依頼と製造ラインの確立。農作物を生産し自給自足の出来る体制の構築。今後も集まってくると思われる者達のための住居場所の確保と建築、などなど。色々とやることは大量にあるぞ？　その陣頭指揮を頼んでもいいか？」
着いていけないことに罪悪感を覚えてしまうほど、琴音は優しく責任感が強い娘だ。
ならば「残る価値のある仕事」を任せるとなれば……
「!!……はいっ！　任せてください！」
この通り。やる気たっぷり元気な返事をしてくれる。
「……ありがとうございます」
もちろん聡い彼女には俺の考えなどお見通し。
ちゃんとお礼も忘れないのだから、本当にしっかりしている。
「コホン。じゃあ任せる。行くぞエヴァ」
「うん！」
「いってらっしゃい」

琴音や会議場にいた者達に後を任せ、彼らの見送りの中、俺とエヴァは晴れ渡る空に浮遊して目的地に飛び立った。